以上のような事情は、太田文の出石大社の項にもうかがうことができる。太田文にみえる出石大社は、一四一町六反六〇分という広大な神領をもっていたが、そのうちの六丁半の領主佃は実際には案主給になっていて、案主である「藤肥前々司」の給田になっているので、その収穫が出石大社の収入になるわけでは決してなかった。太田文が作成された段階では「藤肥前々司」はすでに死去していて、その遺領は三人の子息に分領されていたから、出石大社の領主佃もこれら三人の子息たちの分領になっていたのであろう。鎌倉時代には、出石大社の神威は決して古代のような絶対的なものではなかったのである。

第二節　南北朝内乱期の出石

1　南北朝内乱と但馬の諸氏

元弘の乱と但馬の武士

一三三三年（元弘三）三月、聖護院宮静尊法親王を奉じて上洛の途についた但馬守護太田守延は、伯耆から上洛してきた千種忠顕と合流して京都に攻め入ったが、四月八日の京都二条大宮の合戦で戦死してしまった。それ以後、但馬の国人たちはその中心となるべき勢力を失った。このとき養父郡小佐郷一方地頭の伊達孫三郎入道道西・宗幸・宗重三兄弟も従軍しており、宗幸は左肩を射られ、家人和田次郎と中間十郎太郎が討ち死にしている。このときの合戦には、阿弥彦三郎・安原彦五郎・枚田彦太郎・楯彦太郎らの但馬の武士も参加していた（『伊達文書』）。それらの但馬の武士たちの多くは、伊達氏や安原・枚田氏などのように千種忠顕に属して元弘の乱を戦って本領を安堵されたが、また一方では養父郡朝倉氏のように足利高氏（尊氏）に属したものもあり、それだけに建武新政崩壊後の、但馬の武士の身の処し方には大きな混迷がみられるのである。

目まぐるしく変わった但馬守護

但馬における延暦寺末寺の中心は進美寺であって、進美寺寺僧も元弘の乱を戦い、建武新政崩壊後も但馬における南朝勢力の中核となった。進美寺から円山川を下って河口に至る一帯が南朝勢力の強い地域で、河口近くに拠点として三開山城、気比城などを構えていたほか、但馬の各地にその与党が分散していた。

それに対する北朝勢力は、在地に守護となるような強大な勢力をもたなかったから、桃井・今川・上杉・仁木などの武将が但馬に送り込まれて、守護として作戦の指揮をとったが、正直に言

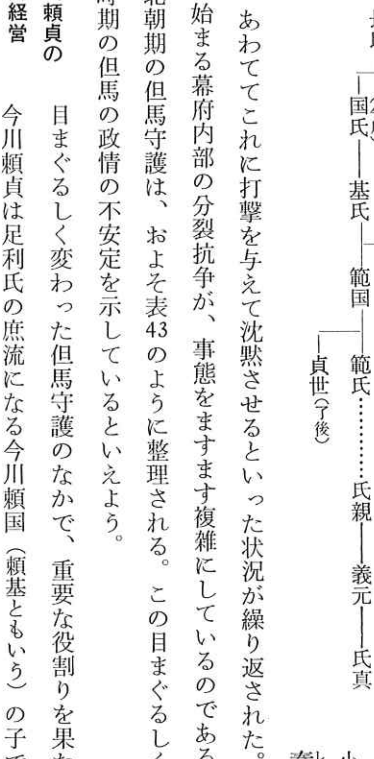
写真 118　三開山城跡（豊岡市）

表 43　南北朝期の但馬守護一覧

	年　　代	守護名
1	←―1337年(建武 4)9. 8―→	小俣禅師来全
2	1338年(建武 5)5. 1―→	桃井兵部大輔盛義
3	〃 年(〃)	吉良貞家
4	←―1339年(暦応 2)3. 18―→	今川頼貞(守護代)
5	1349年(貞和 5)4. 11―→	今川頼貞
6	〃 年(〃)12―→	上杉朝房
7	←―1350年(観応元)4.	〃
8	〃 年(〃)7. 28―→	今川頼貞
9	←―1351年(観応 2)正―→	〃
10	〃 年(〃)3―→	上野左馬助(頼兼)
11	←― 〃 年(〃)8	〃
12	1352年(観応 3)5―→	今川頼貞
13	←― 〃 年(文和元)12	〃
14	1362年(貞治元)	仁木頼勝
15	←―1366年(貞治 5)12―→	長道金
16	←―1370年(応安 3)10―→	長伊豆入道
17	1372年(応安 5)12―→	山名師義

（主として『日高町史』資料編をもとにして作成した）

表44　今川氏略系図



ると、あわててこれに打撃を与えて沈黙させるといった状況が繰り返された。加えて観応の擾乱（足利氏の内紛）に始まる幕府内部の分裂抗争が、事態をますます複雑にしているのである。

南北朝期の但馬守護は、およそ表43のように整理される。この目まぐるしく変わる但馬守護は、そのままこの時期の但馬の政情の不安定を示しているといえよう。

今川頼貞の但馬経営

目まぐるしく変わった但馬守護のなかで、重要な役割りを果たしたのは今川頼貞である。今川頼貞は足利氏の庶流になる今川頼国（頼基ともいう）の子で、範国の甥に当たるから、範国の子今川貞世（了後）とは従兄弟になる。父の頼国は武勇の誉れ高く、中先代の乱のとき、海道の大将として京都から下向し、遠江・駿河・相模の各地を転戦し、相模川で討ち死にした。頼国の戦死によって今川氏の家督は弟の範国が嗣ぎ、足利氏に従って一族を率いて活躍し、遠江・駿河両国の守護となり、子孫その職を継いで戦国時代の今川義元・氏真に至るのである。

範国の子貞世（了後）は、幕府の侍所・引付頭人を歴任して九州探題となって在職二五年、複雑な九州の政治情勢のなかで幕府権力確立のために、よくその才腕を振るったことは周知のとおりである。

今川頼貞が活躍した時期は、叔父の範国のそれとほぼ重なり、貞世の活躍する時期に先んずる。頼貞は父

えば、幕府が但馬をそれほど重視していたわけでは決してなく、小康を得れば放置し、南朝方の蠢動（うごめくこと）が活発化す

の戦死後、範国が属した足利尊氏に従って転戦し、一三三六年（建武三）五月、尊氏・直義兄弟に従って九州より東上したが、播磨の室津で仁木頼章とともに本隊を離れて、但馬・丹波の後醍醐天皇方の勢力の掃討を命じられた。それだけに但馬・丹波には天皇方の武士が多かったということであり、また西から京都を攻めるには山陰道を是非とも押さえておかねばならぬという軍事的意味もあったであろう。仁木・今川のうちでは、丹波を仁木、但馬を今川が分担することになったが、このとき今川頼貞に従った武士に播磨の広峰社の広峰氏があった。その軍忠状（『広嶺忠昭氏所蔵文書』）によれば、広峰の当主又太郎入道昌俊（貞長）は広峰山城に楯籠もり、名代として弟の少納言房長源が若党刑部五郎長利らを率いて参軍したという。長源らは同年四月四日但馬に着き、五月三日に枚田河原（和田山町枚田付近の円山川の河原）で合戦があり、五・六日には丹波国佐治山（氷上郡青垣町佐治町付近の山）で、同一六日には但馬の気比城合戦があった。長源は気比城の合戦で、右股を負傷した。気比城は豊岡市気比の南西にある高城山（標高一八〇メートル）の山頂にあった。急峻な独立山塊で、三開山城を主城とする但馬の南朝軍の重要な城であったらしい。今川頼貞は同年七月には播磨・但馬の足利方の武士たちを率いて上洛し、賀茂河原の合戦に参加している。

写真 119　恒良親王幽居跡（但東町）

同年八月、京都では光明天皇が践祚（天皇の位につくこと）して、比叡山に行在を構える後醍醐天皇と両立することになったが、戦局は尊氏方が次第

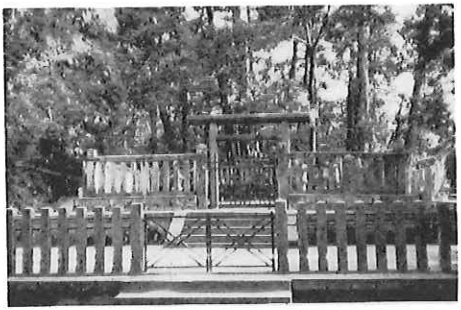


写真 120　後醍醐天皇陵（奈良県吉野町）

に新田方を圧倒し、一〇月に後醍醐天皇は京都に還幸し、太上天皇の尊号を受けて光明天皇に神器を授けた。還幸に先だって後醍醐天皇は新田義貞に皇太子恒良親王と、尊良親王を奉じて越前に落ち延びて再起を図らしめたが、このとき天皇は皇太子に神器を授けている。のちに後醍醐天皇が京都を脱出して吉野に潜幸したとき、天皇は神器を携行しており、この時期、三様の神器があったことになる。後醍醐天皇はもちろん吉野に携行したのが真器であると主張しており、おそらくそのとおりなのであろうが、光明天皇に渡したのは偽器であるにせよ、皇太子恒良親王にまで偽器を渡しており、新田義貞はそれを真器と信じて二皇子を奉じて越前に下ったのだから、義貞は老獪な天皇に全くいいようにあしらわれたことになる。建武新政が破綻した根底には、目的のためには手段を選ばない天皇の、このような不誠実さがあったことは見逃せない。

但馬の南朝軍蜂起

地方の武士には後醍醐天皇の自己中心の政治姿勢が見抜けなかった。天皇のもつ神権的権威は、畏怖すべき尊いものと、一般の武士たちにはうけとられていた。一三三七年（建武四、南朝延元二）、但馬の南朝軍は援を越前の新田義貞に乞い、義貞は子義宗を但馬に送った。義宗は豊岡の三開山城に迎えられ、但馬の南朝軍は士気大いにあがった。とはいっても、進美寺を中心とする山門末寺や円山川下流に点々と南朝方の拠点があるだけで、但馬は全般的には足利方であり、出石郡菅荘でもこの年の年号は

北朝年号が使われている（『川崎文書』）。

足利直義は但馬の南朝軍をこのまま放置しておいては、将来大事に至ることを恐れて、五月に小俣来全を遣わして但馬・丹波の南朝軍を討たせた。このときも丹波は主として仁木頼章が担当し、来全はこれに呼応しつつ但馬の南朝軍の討伐に当たり、一応の成果をあげて帰京したらしい。

ところが来全が帰京すると、また南朝軍が蠢動を始める。同年九月に「但馬国凶徒誅伐」が問題となり、直義は桃井盛義を守護に送り込んだ。盛義は翌一三三八年（建武五）五月ごろを頂点に、南朝軍の拠点、進美寺を攻めたが、なおこれを完全に制圧できなかったらしい。

このころ、今川頼貞は越前の新田義貞軍を攻めていた。義貞は南朝軍の総帥であり、越前守護斯波高経を中心に丹波・美作の勢を率いる仁木頼章と、但馬・若狭の兵を率いる今川頼貞がこれを援けたと、『太平記』巻一七の「金崎ノ城攻事」に見えるから、但馬の足利方の武士が多く今川頼貞に属して、新田義貞を攻めていたことが分かる。但馬の南朝軍はその手薄なのに乗じて蠢動していたのであって、義貞もまた敵の後方撹乱を狙って義宗を送り込んだのであった。

一三三八年（暦応元、南朝延元三）閏七月二日、義貞が越前燈明寺畷で戦死し、新田軍が壊滅すると、今川頼貞は但馬に戻って、進美寺攻略の主力部隊となった。頼貞が正式に但馬守護に補任されたのは、一三四九年（貞和五）四月一一日のことであるが（『今川家古文章写』）、それ以前からも守護の機能を代行しており、実質的には頼貞が但馬守護であった。

観応の擾乱と但馬

一三四一年（暦応四）三月、塩冶高貞が京都から出奔し、直義は山名時氏と桃井直常に命じて追討させた。『太平記』によれば、尊氏の執事高師直が高貞の妻に懸想して拒絶され、これを恨んで讒言したので、高貞はとても遁れぬ身なればと、本国に逃げ下って挙兵しようと、妻子を伴って鷹狩りをよそおい、二心なき若党三〇余人を連れて出奔したのだと書いている。塩冶高貞は近江の佐々木氏の一族で、鎌倉時代以来、出雲に勢力を蓄え、当時は惣領家の京極道誉とともに尊氏に属して出雲守護職に任ぜられていた。

この年三月に越前で南朝方の動きが活発化し、北朝方では高師春に命じて、加賀・能登・越中の兵を率い、土岐頼遠には美濃・尾張の兵を率い、六角氏頼には近江の兵を率いてこれを攻めさせるとともに、塩冶高貞は海上から出雲・伯耆の勢を率いて、兵船三〇〇艘で攻めさせる手筈をととのえているやさきのできごとであった。

高貞追討を命ぜられた山名時氏は伯耆守護、桃井直常は若狭守護であった。時氏らは播磨景山（蔭山荘、姫路市）で追い付き、高貞を自害させて事件は落着したが（『師守記』）、『太平記』では播磨の陰山で死んだのは高貞の妻子と一族郎党たちで、高貞は別コースをとって本国出雲に逃げ帰り、山名時氏に攻められて佐々布山（島根県八束郡宍道町）で自害して果てたことになっている。

ともかくも山名時氏はこの功によって出雲守護職を得て、のちに山陰道に覇を唱える根拠をつくるのであるが、実はこの塩冶高貞の事件が、観応擾乱の序曲となっている。

写真 121　足利義詮の墓と並んだ楠正行の首塚（京都市）

師直と直義の対立

『太平記』の描く高師直は、「執事ノ宮廻りニ、手向ヲ受ヌ神モナシ」といわれるほど好色で、恩賞が少ないと不平をいう武士には近辺の寺社本所領を押領せよと教え、都に王（天皇）というものがいて多くの所領をもち、内裏や院御所ではいちいち下馬しなければならないのは面倒だから、もしどうしても王がなければならないのなら、木像か鋳造で間にあわせておいて、生きた院・国王はすべてどこかへ流し捨てればよいと放言するほど不敵で放縦だった。

一方の直義は、兄の尊氏から政務を一任されてきた几帳面な実務家で、禅や漢詩文にも理解をもつ文化人でもあったから、両者の性格は根本的に違っている上に、直義は上杉・畠山・桃井・石塔などの関東に勢力を張る足利一門の豪族たちを握っており、山名時氏もその一人であった。彼等は、尊氏の威をかりて傍若無人に専横をきわめる師直を嫌っていたのである。

一三四七年（貞和三）、楠木正成の遺児正行の活躍が活発化し、九月に河内藤井寺で細川顕氏を破り、一一月には直義から増援された山名時氏を加えた大軍を摂津天王寺に撃破した。翌一三四八年（貞和四）正月、高師直は大軍を率いて河内四条畷に正行を攻めて、正行を敗死させ、余勢を駆って吉野の皇居を攻めてこれを焼き、後村上天皇は難を賀名生に避けねばならなかった。

師直の武名は大いにあがったが、師直が巨大化することを恐れた直

義は、兄尊氏に師直の執事罷免を強要して承知させた。直義の腹心上杉重能・畠山直宗らは秘かに師直兄弟の誅伐を謀ったが、密議が師直に洩れて、一三四九年（貞和五）八月の師直のクーデターが勃発した。『太平記』によれば、師直方には山名時氏・今川心省（範国）・同頼貞・桃井義盛・仁木頼章らがおり、直義方には吉良満義・同満貞・上杉朝房らがいる。

二八一ページに掲出した但馬の守護表のうち、今川頼貞は尊氏・師直党で、但馬の情勢に並み並みならぬ関心をもっていた直義が送り込んだ、小俣頼全・吉良貞家・上杉朝房らは直義党の武将であったのである。

クーデターは成功し、上杉重能・畠山直宗は越前に配流となり、師直派のために殺された。

尊氏は夢窓疎石の仲介による和議を調停し、直義は政務担当を離れ、代わって鎌倉から尊氏の子義詮が上洛して政務をとることとし、直義はこれを後見することとなり、師直を再び執事に復活させることで、両者の妥協を図った。上杉朝房がこのころ但馬守護に補任されたのは、この妥協の産物らしいという。

和議は成立しても、師直の勝利、直義の敗北の結果の和議であり、師直は和議そのものに不満でしきりに直義党を圧迫し、直義はついに細川顕氏の邸で出家して恵源と名を改め、政務から完全に手を引かねばならなくなった。

尊氏の子で、義詮には兄に当たる直冬は、父から疎んぜられ実子のなかった直義の養子となっていた。直冬は尊氏を深く怨み、反対に直義を崇拝していたが、そのころ中国探題として備後の鞆に派遣されていた。師直は直冬の勢力の拡大することを恐れて、尊氏に直冬出家の命令を出させ、直冬が命令に従わないのを見込して師直党に攻めさせた。直冬は九州に逃れたが、少弐頼尚らの支持を得てたちまちに九州を従えて尊氏

に反した。事態の深刻化に驚いた尊氏が、直冬追討のために西国へ向けて出発した隙に、直義（恵源入道）は石塔頼房を従えて大和へ脱出し、使者を吉野に遣わして南朝に降参した。直義党の畠山国清・桃井直常らは直義に応じ、南朝軍と連合して京都の足利義詮を攻めてこれを京都から追い落とした。直義党は、京都の急変を聞いてあわてて京都に攻めのぼろうとした尊氏と、播磨光明寺・摂津御影浜などで戦って大勝し、一時は尊氏が自殺しようとしたほどであった。結局、尊氏父子は直義に降参し、高師直兄弟も出家して降参したが、師直らは武庫川のほとりで上杉氏らの手で殺された。直義と尊氏の間には和議が成立したが、諸将は尊氏党と直義党に分裂して対立し、疑心暗鬼となって本国に帰るものが続出するほど混乱した。

但馬守護が上杉朝房からまた今川頼貞に代えられたのは一三五〇年（観応元）七月であるが、このころ直義党の土岐周済が美濃に挙兵し、足利義詮・高師直らが兵を率いてその討伐に向かっているから、尊氏は妥協の産物である上杉氏を排して、信頼する今川頼貞に但馬を確保させておこうとした結果であったし、翌年三月に今川頼貞を排して上野左馬助頼兼が但馬守護に任命されたのは、直義が尊氏兄弟に勝ったときに当たっており、直義が尊氏党の頼貞を排して、自派の頼兼で但馬を固めようとした任命だったのである。

尊氏父子と直義の和議は、同年（観応二）七月ごろから破綻しはじめた。義詮と直義が不和となり、直義は政務を辞した。戦闘の再発に備えて、八月には直義が一党を率いて北国に走った。山名時氏・上野頼兼・赤松範資らが直義に従っていた。但馬守護が上野頼兼から三度今川頼貞に代わるのはこのためである。

2　山名時氏・師義

山名時氏の動き

このとき若狭・丹波・伯耆の守護山名時氏は、さきの和平ののち直義から出雲守護を佐々木道誉に代わって拝命したが、その恩義から直義党に乗り替え、直義に従って北国に走ったのである。のちに但馬の此隅山城を本拠として、山陰諸国を制覇した山名氏は、その興隆の基礎を山名時氏が一代で固めた。初めは尊氏・師直党として活躍し、このとき以後は直義党に転じ、直義亡きあとは直冬党の重鎮して尊氏・義詮父子を苦しめ、好機をとらえて義詮に降服してその領国を確保したのである。山名時氏は、その意味では、南北朝内乱期の典型的梟雄（あらく強き者）であった。

山名氏は上野国緑野郡山名荘を本貫地とする新田氏庶流の武士である。新田氏の祖義重の長子義範が山名氏の氏祖で、次子義俊は碓氷郡里見郷を領して里見氏の祖となり、三子義兼が新田氏本宗を嗣ぎ新田郡新田荘を領した。末子の義季は新田郡徳川郷を領して徳川氏の祖となったという（藤田精一『新田氏研究』）。のちの徳川将軍家は一五六六年（永禄九）家康が松平氏を改めて徳川氏を称したもので、徳川氏が三河国松平郷に移って松平氏を名乗ったのだから、本姓に復したのだと主張しているが、真偽については疑問が多い。

それはさておき、山名氏は新田氏一門の名門とはいっても、今川了俊

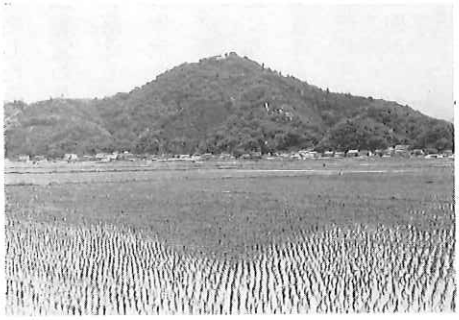


写真 122　此隅山城跡（西面）

（貞世）が『難太平記』で「元弘以往は、ただ民百姓のごとくにて、上野の山名といふ所より出侍しかば、渡世のかなしさも身の程も知にき」と述べているように、農民的な在地の小領主に過ぎなかった。山名時氏は新田義貞に従って鎌倉攻めに参加したが、山名一族が建武新政府からどれほどの恩賞に与ったのかも明らかでないし、新政府の要職に任じられた形跡もない。あるいはその恩賞の不満からか、一三三五年（建武二）の足利尊氏の鎌倉下向に時氏は従っており、弟兼義とともに箱根・竹ノ下の合戦に足利方の部将として活躍している。その後、足利尊氏に従って転戦し、九州下向にも随従した。恐らく本貫地である山名荘を義貞一門に奪われていて、帰るべき土地をもたなかったのであろう。相次ぐ戦闘のなかで、時氏の勇猛ぶりが認められてしだいに頭角をあらわし、やがて一三三七年（建武四）七月までに尊氏から伯耆守護に任じられている（『三宝院文書』）。名和長年はその前年（建武三）六月、京都内野の戦いで戦死しているし、この戦いに山名時氏は足利方の一方の部将として奮戦しているから、時氏の伯耆守護補任はその恩賞であったのかも知れない。ここに時氏は初めて守護となったのだが、伯耆は名和氏の本拠地であって南朝勢力が強く、勇猛な時氏にそれを制圧させるという困難な任務が与えられたのでもあった。時氏は苦労しながらも伯耆の南朝勢力抑圧に成功し、さらに塩冶高貞追討を命じられ高貞を追ってこれを殺した。時氏はこの功によって、出雲守護職を得たが、一三四三年（康永二）八月に出雲守護は塩冶氏の本宗である京極高氏（道誉）に与えられ、山名時氏にはその代わりとしてであろうか、同年一二月新たに丹波国守護職が与えられている。このころ丹波守護は足利氏一門の仁木頼章で、守護代に在地の有力土豪荻野彦六朝忠を起用していたが、朝忠が高山寺城（氷上郡氷上町）に拠って、南朝方に呼応して反乱を起こしたので、仁木頼章はその責任を負って辞職したのである。

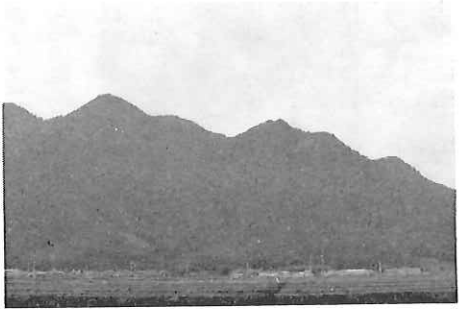


写真 123　高山寺城跡（氷上町・氷上町提供）

山名時氏が丹波守護に起用されたのは荻野誅伐のためであり、当時、足利尊氏がいかに山名時氏の戦闘能力を高く評価していたかを示す事例でもある。

山名時氏は丹波守護を拝任すると、さきに伯耆守護代であった重臣の小林左京亮を丹波守護代に任命し、小林以下の軍勢を引率して丹波に入部し、朝忠の拠る高山寺城を囲み、これを降（くだ）した。一三四八年（貞和四）六月には、直義党の若狭守護大高重成が将軍尊氏の勘気を蒙って所領を収公されて、出仕を停められた。山名時氏は、その跡をうけて若狭守護に任ぜられた。

このようにして時氏は、初め伯耆守護に任ぜられてから一二年間で、その守護国は丹波・若狭に拡大されたが、この間に一三四五年（貞和元）には幕府侍所所司（さむらいどころしょし）にも任ぜられており、しだいに幕府の有力武将としての地位を確立した。遠く東国の本貫地を離れて山名氏がこれらの三国を領国として掌握するのは、寺社本所領を守護領に取り込むか、在地の国人などを被官化するか、のいずれかの方法によらねばならない。しかしこの段階では守護の領国支配は徐々に進行しつつあったとはいえ、まだそれほど強固に固定化されてはいなかった。山名氏の領国支配が在地にまで貫徹するようになるのは、時氏が直義党に乗り替えて尊氏・義詮父子と徹底的に対立した一三五一年（観応二）八月以降のことである。

時氏、但馬守護を僭称

山名時氏が幕府から正式に但馬守護に任ぜられた事実はない。一三六三年（貞治二）九月、将軍義詮に降参する形で和睦し、事実として但馬を確保していることを黙認されただけである。時氏が但馬に強い足掛かりをもったのは一三四三年（康永二）一二月、丹波守護仁木頼章の代官荻野朝忠が反し、責任をとって守護を辞職した頼章に代わって、山名時氏が丹波守護に任ぜられたときであった。時氏は伯耆守護代小林左京亮を呼び戻して丹波守護代とし、朝忠を高山寺城に攻めてこれを降したが、このとき但馬の国人八木荘の地頭八木泰家が時氏に従っていた。

写真 124　山名時氏遵行状（綾部市 安国寺蔵）

荻野朝忠の反乱を鎮圧した時氏は、余勢を駆って翌一三四四年（康永三）二月に但馬の三開山城を攻めてこれを陥れた。この時には、八木氏のほかに太田・三宅・田結庄・長氏らの但馬の国人たちが随従したという。三開山城を陥れた時氏は、ここを本拠として但馬守護を僭称するに至った（『南朝編年記略』所引「妙楽寺文書」）。

但馬の国人のなかで、八木泰家がもっとも早く山名氏に従うようになったのは、一三三七年（建武四）に伯耆守護となって以来、京都と伯耆を結ぶ山陰道を抑える必要があったためだと説明されている。八木氏とともに長能登守や伊達三郎などの、養父郡の国人たちも早くから山名時氏の家臣国に組み込まれていた。

時氏は三開山城を本拠とするようになって、南但から北但へと勢力

を固め始めた。まず、田結庄・三宅・太田氏などの城崎郡・出石郡の有力な国人たちが時氏に従うようになった。しかし、まだ時氏の時代には、但馬がはっきりと山名氏の本拠になったわけではない。時氏の時代はむしろ因幡・伯耆にその根拠があり、美作・丹波・丹後が公認された守護職で、ほかに若狭国今富名の領主職を持っていた（『建武四若狭国税所今富名領主代々次第』）。事実上、山名氏の支配下にあった出雲・隠岐両国は京極道誉に安堵されて、山名氏の勢力西進を阻む壁をつくった。三開山城を陥れて以後、山名時氏はここを拠点に北但への支配を強化して但馬守護を僭称していたが、幕府が山名時氏を但馬守護として認めた事実はなく、但馬守護は仁木頼勝にもとのまま安堵されており、また、但馬の国人長駿河守や長伊豆入道がこれに任ぜられたらしいという（水野恭一郎『南北朝内乱期における山名氏の動向』）。

山名師義、但馬守護となる

山名一族の守護領は、時氏が丹波・伯耆、師義が丹後、義理が美作、氏冬が因幡を拝領したが、氏冬が一三七〇年（応安三）正月に父に先立って死ぬと、その遺領はその子氏家が継いだ。翌一三七一年（応安四）二月、山名時氏が七三歳で京都で死ぬと、その所管の守護領は伯耆が惣領師義に、丹波が氏清によって受け継がれることになった。但馬が山名師義に与えられたのは、さらにその翌年一三七二年（応安五）一二月のことで、大葦入道が守護代と

写真 125　山名師義書状
（朽木家文書・内閣文庫蔵）

して但馬に下向した(『祇園執行日記』)。長氏は山名与党の国人であって、幕府もこれ以上現実を無視して、山名氏の但馬支配を否定し続けることができなくなったのであろう。

ところが、山名師義が一三七六年(永和二)三月に病死すると、嫡子義幸が丹後守護を継いで家督となったが、病弱で間もなく病死し、末子満幸が家督、惣領となった。満幸はまだ若年であったために、師義の末弟で師義に養われていた時義がその後見をした。時義は兄師義の女を妻としてその猶子(兄の養子)になっていたが、伯耆・但馬・備後の守護職を兼ね(時義が備後守護を拝領したのは一三七九年〈康暦元年〉のこと)、隠然たる勢力をもつようになった。ちょうどこのころ、幕府諸将の内訌がおこり、京極道誉の子高秀が、土岐頼康らとともに将軍足利義満に離反した。義満は近江守護六角氏に高秀を攻めさせ、京都の京極氏の邸を破壊させた。京極高秀は父道誉の死後、その遺領出雲・隠岐守護職を安堵されていたが、このとき両国とも没収されて山名氏に与えられ、隠岐は時義が、出雲は義幸が拝領した(義幸が死ぬと、弟満幸が丹後・出雲両国守護となる)。

山名満幸は時氏の正嫡意識が強く、叔父時義の後見が不満であったし、山名氏清(時氏の四男)は、弟時義(同五男)が満幸の後見人として強盛になることを不快とした。両者は満幸が氏清の女を妻とすることで連帯して、結束を誇ってきた山名氏内部に、内紛の芽をしだいに大きくしつつあった。

明徳の乱

将軍足利義満は、山名氏が強大になりすぎることを恐れ、打倒の機会をねらっていた。とくに山名氏が紀伊・和泉に進出したことを義満は不快に思った。山陰の雄であった山名氏が、和泉の良港堺を抑えることによって、鞆・尾道を含む備後領有の意味も倍加し、山陽・瀬戸内に活躍する手

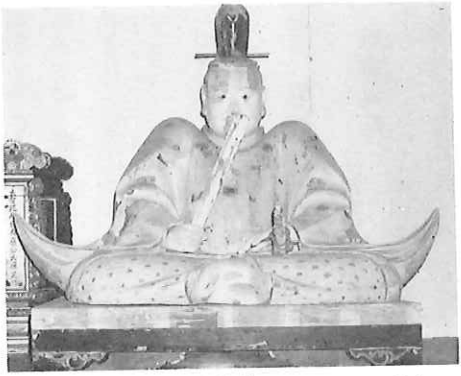


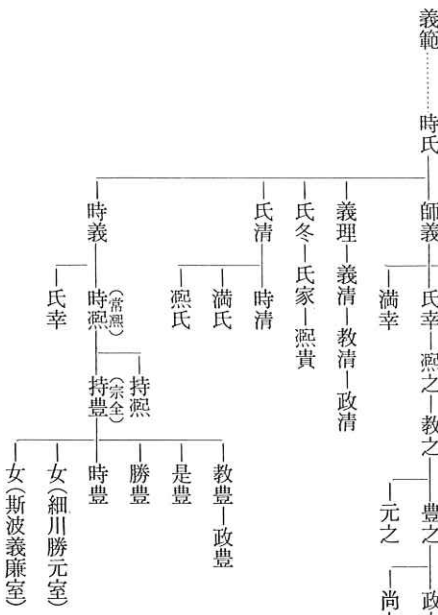
写真 126　山名時義像　（竹野町 円通寺蔵）

がかりをつかむことになったからである。

山名氏の急激な台頭に大きな脅威をいだいたのは、紀伊・和泉を奪われた細川氏のほかに、山名氏が石見守護になって直接圧迫を感じるようになった大内氏もまた、山名氏の勢力拡張に大きな恐怖を抱くようになった。義満はこれらの状況を利用して、一三八二年（永徳二）に幕府から離反して再び南朝に帰参した楠木正儀のあとの河内守護に畠山基国を入れ、細川頼之の弟頼元を摂津守護にして、山名氏を牽制しながら時期をうかがっていたが、山名時義が死ぬとにわかに山名氏への介入を開始した。

一三九〇年（康応二）三月、将軍足利義満は、山名時義が生前に将軍をないがしろにする振る舞いが多かったという理由で、山名氏清・満幸に命じて時義の後継者である時熙・氏幸兄弟を討たせた。ただそれだけの理由だが、それはりっぱな追討理由であった。氏幸の自署は氏之となっていて、時義の子らしい。時熙が時義の弟であるがその女を娶って養子になっていたから、義弟ではあった。氏清らは但馬に侵入して、時熙兄弟を備後に追った。出石神社には、明徳元年（一三九〇）九月一七日付の民部少輔（花押）署名の禁制が出ている。山名氏清の禁制であって、氏清はこの年九月にはほぼ但馬を制圧して、小盗（此隅）山城を手中に収めた。氏清は将軍義満に、時熙らを将来にわたって宥免（許すこと）しない保証を求め、義満はこれを認めた。禁制の文言には、氏清の新惣領としての自負が溢れている。かくして時

表 45　山名氏略系図　—その1—



熙らの領国は氏清（但馬）と満幸（伯耆）に与えられた。ところが翌年になると、義満は態度を急変させる。管領細川頼之を追い落として管領についていた斯波義将が罷免されて下国し、細川頼元が管領になった。頼元は頼之の弟で、兄の養子となってその家を継いでいたが、義満は頼之を上洛させて頼元を後見させたから、実質的には頼之を復活させたのである。斯波派の山名氏清は孤立を恐れてあせるが、たまたま時熙らが上京して義満の宥免を請い、義満がこれを許したことを知った氏清は、将軍を宇治の別業に紅葉狩りを名として招待しておきながら、風邪を理由に参会せず義満の不快をつのらせた。氏清らの追討を決意した義満は、満幸が仙洞（後円融上皇）御領、出雲国横田荘を押領したことを理由に、京都を追放した。満幸は和泉の堺に行き、氏清を頼って、氏清に謀反を勧めた。氏清も挙兵を決意し、和泉から兵を率いて入京しようとして山崎に陣をとり、満幸も丹波から京都に迫った。山名一族の氏家（因幡守護）・義理（美作・紀伊守護）も氏清らに同調するために京都を出奔した。義満は細川頼之・畠山基国・赤松義則・一色詮範・大内義弘・今川泰範・六角満高らの有力守護と、将軍直属の親衛

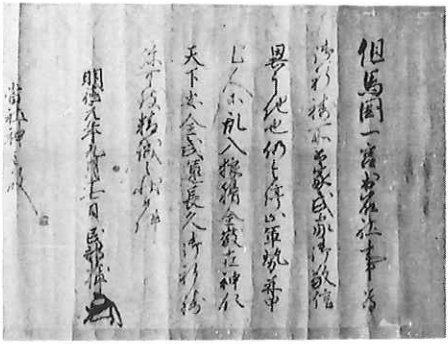


写真 127　山名氏清の禁制　（出石神社蔵）

隊を督してこれを迎え討ち、氏清は二条大宮で戦死し、満幸・氏家らは遁走した。氏清の妻は堺にあって敗報を受け、夫に殉じて自殺し、侍女三人もこれに殉じた（『大日本史』）。

山名時熙・氏幸は部下の将士を召集して、追討軍に加わっていた。氏清・満幸らが率いていた領国の武士と同じ領国の武士たちである。『明徳記』によれば、山名時熙に属した柿屋弾正の言葉として、「御方ノ事ハ申ニ及バズ、敵ト申ストモ皆日比肩ヲ比シ傍輩也」と書いているとおりである。敵味方ともに多くの戦死者を出したが、そのなかに満幸の手に属して内野で戦死した土屋党五十三人があった。『明徳記』の土屋党が、どこの武士団であったのかは何ら記するところがないが、ただ気になるのは、天隠竜沢（建仁寺二一八世の禅僧、播磨出身で赤松氏と関係が深かった）の『翠竹真如集』にみえる「土屋越中守豊春妻像賛」の次のような叙述である。人は垣屋と称するが、垣屋氏は自身では土屋氏を名乗っており、源氏の出自である山名氏に仕えてはいるが、本姓は平氏である、と。つまり土屋党は、相模国大住郡土屋邑を本貫地とする土屋氏の末流らしい。相模の土屋氏は『平家物語』・『吾妻鏡』以下の多くの軍記物や史書にその名が頻出する関東の名門のひとつであった。ふつう、垣屋氏は山名氏の傍流で、その執事的地位にあった豪族として説明されるのだが、不思議なことには、山名時氏のころには垣屋氏の名がでてこない。土屋越中守豊春の祖父は「万騎の先を争って命を京都の内野に隕した」と寿像賛にみえるから、

『明徳記』にみえる勇将柿屋弾正のことらしい。その孫にあたる土屋越中守豊春は、天隠竜沢の賛によれば、斉（中国周代の一国）の桓公の臣であった管仲、蜀漢の名臣であった諸葛亮（孔明）にも比すべき山名氏の功臣であったというのだから、垣屋氏の台頭は「柿屋弾正」以後のことになる。『明徳記』の土屋党は、すなわち垣屋一族のことであって、垣屋氏の多くは氏清方として壊滅し、その生き残りと時熙方についた「柿屋弾正」の末流とが、のちの山名氏四天王のひとりに数えられる垣屋一族となったといえるのではないか、と考えておこう。

第三節　室町時代の出石

1　山名時煕

時煕、但馬守護となる

翌一三九二年（明徳三）正月四日、論功行賞があって、山名氏の旧領は次のように配分された。山城＝畠山基国　和泉・紀伊＝大内義弘　丹波＝細川頼元　丹後＝一色満範　但馬＝山名時煕　美作＝赤松義則　伯耆＝山名氏幸　隠岐・出雲＝佐々木高詮

一色詮範には若狭国税所今富荘が恩賞として与えられた。小国の守護より、大荘の今富荘が与えられたのである。詮範の子満範は丹後守護になり、父子で若狭・丹後両国の守護職を兼ねることになった。氏清に属した山名氏家の領国因幡はそのまま氏家が宥免にあずかって再任され、氏家はやがて上洛して義満に謁した。

明徳の乱の結果、「六分一殿」と呼ばれて、全国六六か国のうち一一か国の守護職を一族で占めた山名氏は、但馬・因幡・伯耆三か国をかろうじて確保するまでに圧縮された。但馬についていえば、時煕が守護として残れたのだが、それは決して継続したのではなく、いったん罷免されて失った守護を、明徳の乱の戦功で改めて給付されたことが指摘されている（佐藤進一『南北朝の動乱』、中央公論社『日本の歴史』9）。

写真 128　山名時煕像　（竹野町 円通寺蔵）

但馬が明徳の乱でうけた影響はきわめて深く大きく、時煕は領国支配を初めからやり直さねばならなかったが、時煕は隠忍自重して、それをみごとに完成させた。但馬における時煕の評価は、意外に高いが、その理由は時煕の時代に、但馬が本当の意味で山名領国になったからである。

一三九五年（応永二）三月、山名満幸は京都五条坊門高倉の宿で、侍所別当京極高詮に誅殺（罪を責めて殺すこと）された。敗走して因幡で遁世し、九州へ落ち延びて行方の知れなかった満幸は、秘かに京都に潜入して密告されたのである。その年の六月、義満は出家して天山道有（まもなく道義と改名）と称した。前年（応永元）一二月に将軍を義持に譲って太政大臣になっていた義満は、まだ三九歳の壮年であったが、太政大臣を辞して出家したのであった。多くの大名や廷臣たちが義満にならって出家した。山名時煕が出家して沙弥常煕と号するようになったのも、それ以後のことである。円通寺（竹野町）仏殿両牌銘に、「康応己巳三月　日　常煕書」とあることから、時煕の出家をそれ以前と考えるむきもあるが、それは正しくない。康応己巳は康応元年（一三八九）であるが、その三月二二日に円通寺開山月庵宗光は黒川大明

写真 129　円通寺仏殿　（竹野町須谷）

写真 130　山名時義墓　(竹野町 円通寺)

寺(生野町)で遷化(僧が死ぬこと)した。寿(年)六四、臘(得度以後の年)五〇であった。遺骨舎利(火葬にした骨)は大明寺寝室の東北隅に塔を建てて葬ったが、円通寺では仏殿開堂偈(仏の徳をたたえる経文)を安牌(位牌を安置すること)したのであろう。月庵宗光に深く帰依していた時義は、月庵のあとを追うようにして、同年五月四日、但馬で死んだ。円通寺仏殿に安牌された「檀那」は円通寺殿大等道均公大禅定門と諡名されて円通寺に葬られた時義のことである。時熙はこのとき、まだ二三歳、父の死に先立って出家するはずはない。つまり、円通寺にある仏殿両牌銘の康応己巳三月　日の年紀は、開山月庵宗光示寂(僧が死ぬこと)の日を書いたものであって、常熙がこれを書いた時期はそれからずっと後のことであったのである。そればかりか、『大岡寺文書』によれば、応永三年(一三九六)六月一七日付の寺領散在田安堵状に、まだ宮内少輔(花押)の署名をしている。つまり、宮内少輔の官途名で文書を出すことは、まだこのときまで俗体であったことを示すものであって、出家するには官途を辞して、ただ沙弥(花押)か、または常熙(花押)の署名をするかのどちらかでなければならないからである。

応永の乱と山名氏再興

一三九九年(応永六)一一月、大内義弘の応永の乱が起こった。周防・長門二か国守護であった大内氏は、その後、石見と豊前を加え、明徳の乱の勲功で和泉と紀伊を併合して六か国の守護にのし上がった。とくに大内氏が和泉を領して良港堺を抑え、瀬戸内の制海権を握ることは、それまで

瀬戸内を制してきた細川氏にとって大きな脅威となった。義満は有力外様大名圧迫の鋒さきを大内氏にしぼっていた。義満の意図を察知した大内義弘は、関東公方足利満兼ほか、足利義満に敵意をもつ者を勧誘して大規模な反乱計画をたて、やがて再三に及ぶ義満の上洛命令に応ずる形で、数千の軍兵を率いて海路堺に到着すると、そのまま堺にとどまって、堺の町全体を城砦化する工事を急いだ。義満は禅僧絶海中津を使者として義弘の真意を問わせた。義弘は反意を明らかにしたため、義満は大軍を催して、堺城を攻撃した。幕府軍は攻めあぐみ、烈風の日に放火して堺を全焼させて落城させた。義弘は戦死し、弟弘茂は降服して、乱は終わった。

山名常熙は、このとき義弘に呼応して丹波に挙兵した山名宮田時清（氏清の子）を攻めてこれを平定し、さらに堺の攻撃に合流して、戦った。『応永記』によれば、大内方の猛将杉豊後入道に討たれた山名入道がいる。実名は分からないが、山名一族のなかにも戦死者を出したのである。

大内氏に応じて挙兵した美濃の土岐詮直や近江の京極秀満らも、土岐頼益、京極高詮らの同族にそれぞれ討たれた。関東公方足利満兼は幕府を救援するためと称して出兵したが、大内義弘の敗死を聞いて鎌倉に還り、世は平静に復した。

一四〇〇年（応永七）六月、常熙は与布土中務丞に、朝来郡与布土荘地頭職のうち三〇石を給分として宛行った（『山崎文書』）。常熙は国内の被官人にこのような給分を宛行うという方法で、その従属を強化していくのである。明くる一四〇一年（応永八）三月、常熙は大内氏の旧領のうち、備後守護職を拝領し、佐々木筑前入道・太田垣式部入道の二人を守護代として備後に派遣した（『山内首藤文書』）。翌一四〇二年（応永九）六月に

は、山名氏利に石見国守護職が与えられた。氏利は氏清の子という。

一四〇三（応永一〇）年、将軍家料国とされていた安芸国が常煕に預けられ、翌一四〇四年（応永一一）には山名満氏が守護代になって下向した。満氏もまた氏清の子である。つまり氏清の子は、応永の乱に挙兵して討たれた山名宮田時清を除くと、多くは惣領時煕のもとに身を寄せ、または時煕の推挙で復権しつつあった。その理由は、氏清の女が時煕の妻であったことにあるらしい。

時義の妻は兄師義の女であったし、満幸の妻も氏清の女であった。山名氏内部のこのような同族内結婚は、一族の団結強化に大いに役立っていたと思われる。

義満が将軍家領国とした安芸を山名常煕に預けたのは、鎌倉期以来の守護家であった武田氏を中心とする国人たちの勢力が強くて、なかなか将軍家にも屈服しなかったからで、義満は強大な軍事力をもつ山名氏の力でこれを制圧しようとしたものであった。剛を制するに他の剛をもってし、その剛を次の制すべき目標に立てる義満の常套手段をみてきた時煕は、慎重に事を処理して義満に狙われないように行動した。

かくして、明徳の乱で三か国守護職に追い込まれていた山名氏の守護領国は、時煕の備後・安芸、氏利の石見を加えて六か国になり、明徳の乱後わずか一〇数年で有数の守護大名にまで再興された。

常煕は将軍義持にも重用され、一四一四年（応永二二）には侍所頭人にも任ぜられ、幕府の重臣としての地位をしだいに確実にしていった。

山名持豊の登場

のちの山名宗全、持豊は一四〇四年（応永一一）五月に生まれた。一〇歳で元服し、将軍義持の偏諱（実名の一字）を許されて持豊と名乗った。持豊には兄があった。常煕の嫡子は、一四

二〇年（応永二七）閏正月二一日に二五歳で病死し、栖真院殿欣叟大禅定門の法号を諡られた満時で、その名は将軍義満の偏諱を許されたものらしい。

次兄は、同じく将軍義持から偏諱を許されて持熙と名乗っていた。持熙はあまりその名のあらわれない兄満時とは違って、父時熙の代理として幕府に出仕し、あるいは将軍に供奉するなど、その活躍が顕著であった。一四二八年（正長元）四月、常熙はそのころ流行していた三日病に罹った。前将軍義持が死んで、弟の青蓮院義円が還俗して将軍後継者として、義宣（のちに義教と改名）と名乗ることになり、元号も正長と改まって、諸事清新の気運のみなぎっているときであった。常熙の三日病はもってのほかの大事にいたり、大略は死を待つだけとみえた。その遺跡（後嗣）を持熙・持豊兄弟のどちらにするかについて、常熙は弟の持豊に譲るつもりであったが、将軍義宣は兄のことでもあり、また多年昵近（近侍）の奉公をしてきたとの理由から、持熙に相続させるようにと管領畠山満家に言い付けた（『満済准后日記』）。

写真131　山名持豊の署名

重体にみえた常熙の三日病は奇跡的に本復した。時に常熙は六二歳に達しており、詩歌の教養もあり参禅をくり返して仏教にも詳しく、人柄も重厚で、幕府の重鎮として尊重されるようになっていた。義教は関東公方足利持氏への対応、九州の大友・少弐・菊池氏等に対する方策、大内氏内訌に対する態度、伊勢国司北畠満雅と南朝の小倉宮に対する戦略、山門比叡山への対処など懸案の重要問題について、畠山満家・同満則

・斯波義淳・細川持元・赤松満祐・一色義貫・今川範政らと並んで山名常煕へも諮問することが多かった。

晩年の山名常煕は、幕府の長老のひとりになっていたのである。

晩年の常煕にとって、重大な事件が三つあった。その一つは、将軍によって決定された後嗣持煕が、当の将軍に忌避されて、持豊が後継者として浮上したことである。一四三一年（永享三）五月、持煕は将軍義教に「今度の振る舞い、此間の儀ども以ってほかのさまなり」と忌避されたが、山名常煕は宿老のことだから、元のように出仕させるなり、遠国へ下向させるなりは常煕の所存に任せる、という将軍の意向が伝えられた（『満済准后日記』）。持煕は備後に下国したらしい。一四三三年（永享五）八月に、但馬・備後・安芸・伊賀（この年四月に伊賀守護を加えた）守護山名常煕が辞任した跡は持豊がこれを継ぐことにはなったが、一四三五年（永享七）七月四日に常煕が六九歳で京都で死んだと聞いた後崇光院は、その日記『看聞御記』に「山名今暁逝去云々、遺跡は兄弟相論して籍乱すべきか云々」と書くほどに、混乱は予想されていたのである。

その二つは、一四三二年（永享四）八月の遣明船の派遣である。八月一七日に将軍義教は兵庫に下向して遣明船を見て、須磨・明石を遊覧した。船は五隻、一号船は将軍家、二号船は相国寺、三号船は山名常煕、四号船は斯波・畠山・赤松と三宝院満済らの寄り合い船、五号船は三十三間堂であったが、常煕が単独で出資者になれるほどに富裕であったのである。船団は八月一九日に兵庫津を出帆した。明との交易船は義満時代の屈辱的態度を嫌った義持がこれを中止して以来、義教がこの年に至って復活したのである。遣明船がもたらす珍奇な船載品は、当時、唐物（からもの）とか唐渡（からわた）りと呼ばれて珍重された。その多くは都での生活を彩るか、または贈答品として消えたであろうが、その一部は但馬にも還流して持ち込まれたと思われる。

その三つは、山門攻撃である。一四三三年（永享五）七月、山門領と鹿苑院領との境相論に端を発した山門嗷訴（ごうそ）の一部を認めて、事件を最小限に抑えようとした将軍家は、山門の呪詛が将軍家に向けられていることを知って態度を一変させ、全面的攻撃に転じた。常熙はその指揮官となって、唐崎から山門を攻めた。山門は将軍家に降参を申し入れ、将軍家もこれを許したが、山門領の没収など圧迫を強化し、関東公方足利持氏との連携を知ると一四三四年（永享六）から翌年にかけて全面攻撃を加え、その首謀者を逮捕して殺し、あるいは自殺させた。この間、根本中堂は兵火で炎上し、叡山は壊滅的打撃を受けた。最後の攻撃は、山名持豊が父の代理として発向しているが、ともかくもこの山門攻撃は、のちの織田信長の叡山焼き打ちに比較される暴挙で、その幕府方の責任者が、ほかならぬ常熙であったのである。

写真 132　延暦寺根本中堂　（大津市）

持熙、持豊兄弟の家督争い

『神床家文書』のなかに、一四三六年（永享八）八月廿五日付の山名持豊の自筆の敬白願文一軸がある。謹厳に書かれた願文は、次のとおりである。

敬白

　奉啓上但州一宮出石大明神事

右当家久在、当国守護職、兼掌数国

一門栄耀抜群累代忠功越傍、于茲
持豊為末葉継父祖重代之蹤跡、備親
族数輩之首頭、是則所以
神明擁護之令然也、不可不奉弥崇益
敬、唯旦暮所致祈念天下泰平、国中
豊饒而已者、課社僧神官等時々勤行
無懈、節々礼奠不退者也、於戯憑哉
感応定及子々孫々、慶哉信心必重、生々
世々、仍懇念之旨趣如斯、

永享八年八月廿五日正五位下弾正少弼源持豊

文言（口絵写真参照）には抽象的な箇所が多いが、兄持熙は備後にあって、持豊にあらわな反抗を重ねていた。とくに持豊には正嫡意識が強く、兄持熙を徹底的に追究しようと考えて、この願文を出石神社に納めたものである。持豊は翌一四三七年（永享九）七月、備後に乱入して、国府城に兄持熙を攻めてこれを殺し、その首を京都に送った。結束が固いはずの山名氏は、この骨肉あい食む内訌（内輪もめ）の結果、持豊を惣領として、再構築されることになった。

2　山名持豊

美作守護職をめぐって

山名・赤松両氏の宿命的な対立は、美作守護職をめぐって胚胎（めばえ）し、嘉吉の乱および その後遺症としての、赤松残党のたび重なる蜂起で増幅されて、決定的になった。

まず、鎌倉時代の美作守護は、梶原景時のあと和田義盛が任ぜられ、和田氏が族滅（一族が滅亡すること）されたあとは北条氏がこれを掌握していた。北条氏が滅んだあとには、とくに抜きんでた国人もいなかったので、南北朝時代には山名・赤松両氏が交互に進出して覇をとなえた。

最初に守護職に補任されたのは赤松貞範であったと、赤松方は主張する。『赤松系図』や惟肖得巌（僧侶の名）の『東海瑤華集』に収める赤松貞範三十三回忌の拈香法語では、貞範は箱根・竹ノ下の戦功で、丹波国春日部荘（現兵庫県氷上郡春日町）とともに美作守護職を拝領したという。しかし、少なくとも一三五二年（文和元、南朝正平七）当時の美作守護は、佐々木秀綱（京極道誉の子）であったし、貞範が一三三六年（建武三）以来、美作守護であったということも疑わしい。むしろ、赤松貞範よりさきに美作を支配下に収めたのは、山名時氏であったらしい。一三五二年から翌年にかけて、足利直義が殺されたあと、その遺志をうけついだ足利直冬方の柱石として、南朝方に属して戦っていた山名時氏は、美作から備前にまで進出してほぼ両国をその手中に収めたばかりか、赤松氏の本国播磨深くまで侵入し、

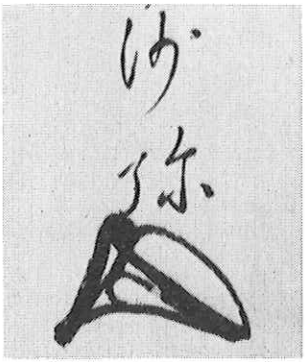


写真 133　山名時氏花押

高岡南条・安田荘・蔭山荘などで、赤松則祐軍と激戦を交えている。赤松氏が足利義詮方、つまり幕府方であったから、南朝方の時氏としては隣接する敵対勢力を討ったまでのことである。赤松氏も但馬に進出して朝来郡を制圧したこともあって、朝来郡から播磨の神崎郡へかける地域、つまり現在、国鉄播但線が走っている円山川上流と市川上流を結ぶ谷筋は、山名・赤松両勢力の激突する危険地帯であったが、美作はこれとは違って両勢力の緩衝地帯になっていた。播磨・備前での山名氏の軍事行動は永続的なものではなかったが、美作はこのときには山名時氏にほぼ制圧され、その領国化したともいえる。幕府は一三五二年（文和元、南朝正平七）一二月に、赤松貞範に美作回復を命じ、貞範は安積盛兼らの播磨の武士を率いて美作の英多（あいだ）城を攻略した。つまり、赤松貞範は幕府の公権力によって美作守護職に補任されてはいるが、事実上美作を領国化していたのは南朝方に属していた山名時氏であったのである。貞範は山名氏に心を通ずる美作の支配に随分てこずったらしいし、結局、それに成功もしなかったが、精一ぱいの努力はしている。一三六〇年（延文五）九月、幕府は美作守護赤松貞範に対して、東福寺領賀茂郷（現岡山県勝田郡勝北町）における広戸左近将監・高山彦五郎らの押妨（おうぼう）（力で他人の所有権を侵すこと）の停止を命じている（『前田家所蔵文書』）。広戸氏は勝田郡広戸村（同上勝北町）を本拠とする菅家党の豪族であるが、貞範がこれらの在地土豪の掌握に苦労している情況が推測できる。

翌一三六一年（康安元）一〇月、山名時氏は再び美作に兵を入れた。将軍義詮から疑われて身に危険が迫った細川清氏が、にわかに南朝方に寝返って、楠木正儀とともに摂津尼崎を奪い、京都に進撃しようとしたのに呼応した時氏の戦略であった。強力な山名時氏に対しては非力な赤松貞範は、則祐に援助を求めて美作に

出兵したが、赤松方の後藤氏の三星城や倉懸城は山名氏軍によって攻略され、美作一国は山名氏に制圧されてしまい、赤松軍は播磨・美作国境付近でしか戦うことができなかった。美作の大半の土豪たちを慴伏（おそれ伏す）させて、ほぼこれを掌握していた山名時氏は、この実績をもとにして足利義詮に降服した一三六三年（貞治二）九月以降、改めて美作守護職を安堵された。

ところが、前述のように一三九一年（明徳二）に山名氏清・満幸らの明徳の乱がおこったとき、赤松義則は侍所として討伐の中心となり、弟満則をはじめ、佐用・柏原・宇野・上村・櫛橋など五七人の将を討死させた。戦後の恩賞で義則に山名氏の旧領美作守護職が与えられたのは、その勲功からすれば当然であった。しかし、山名氏からこれをみれば、赤松氏は旧領を奪ったことになる。山名氏の旧領は、和泉・紀伊を大内義弘が、隠岐・出雲を佐々木高詮が、丹波を細川頼元が、丹後を一色満範が、美作を赤松義則がそれぞれ拝領した。決して赤松氏ひとりが旧領を奪ったわけではなく、その勲功に比すれば赤松氏の得た美作はむしろ軽少なくらいだのに、山名氏の怨恨は赤松氏に集中されたように思える。美作が山名氏の本国に近いことと、美作守護職をめぐるそれまでの両家の対立が、山名氏の怨恨をとくに赤松氏に集中させる原因となったのであろう。

嘉吉の乱で、山名持豊がことさら勇躍して出兵し、満祐誅伐の功を独占しようとあせったのは、幕府が満祐を討った者にその旧領を与えると公表したからである。確かに討伐軍のなかで、山名氏の士気は特別に高かったし、山名軍の猛攻によって赤松満祐の籠もる城山城は陥落し、満祐は自殺した。山名氏は旧領美作を回復しただけではなく、播磨・備前をも領国に加えて、細川氏が確保している備中を除くと、山陰・山陽に

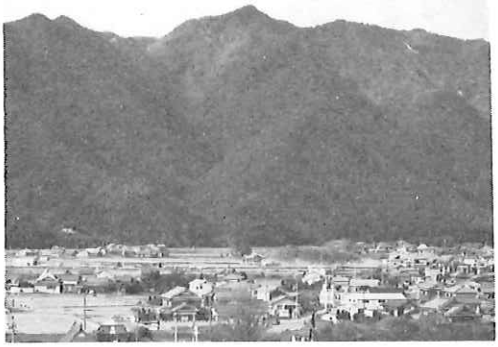


写真 134　城山城跡遠望　（龍野市・龍野市提供）

またがる巨大な地域を塊（かたまり）として領国に塗りつぶすことになったのである。嘉吉の乱の赤松氏は、四方からの討伐軍に囲まれて自壊したから、山名軍が払った犠牲は、京都の赤松邸で将軍義教とともに殺された山名熙貴のほかにはほとんど皆無であった。大将分の戦死者はひとりもいない。明徳の乱で赤松義則がはらった犠牲の代償が美作守護職だったことにくらべると、嘉吉の乱で山名氏がはらった犠牲はほとんどなかったのに播磨・備前・美作三か国の守護職を得たのだから、損得勘定をすれば、山名氏はずいぶんもうけたことになる。ついでに付言すれば、落城直後の城山城の猛火の中から、赤松満祐と安積行秀（将軍義教暗殺の下手人で、播磨下国にあたっては、将軍の首級を剣先に貫いて捧持したという、赤松家臣きっての勇士。満祐自殺の介錯（かいしゃく）をしたという）の首級をとったのは、山名教之の部下、出石四郎景則であったという（『村岡山名家譜』）。「出石」というからは、出石出身の武士であったに相違ない。

赤松残党との戦い

播磨と美作両国に家領の過半をもっていた万里小路時房（までのこうじときふさ）は、乱が意外に早く治まったことを喜んだが、山名持豊が幕府の許しも得ずに半済と称して寺社本所領の年貢を奪い、猛悪の限りをつくしているのを聞いて、もし持豊が守護になれば、一国滅亡するであろうと不安がった（『建内記』）。京都から但馬に下国するにあたって、持豊は侍所として治安の維持にあたるべき責任者でありながら、斯波

の家臣朝倉を赤松被官人と縁者だという理由で闕所にしようとしたり、管領細川持之方の人夫が刈り取った草を無理やりに、しかもわずか三銭で買おうとし、拒否した人夫を打擲（打ちたたく）してその顔を刀で傷つけたり、「陣立」と称して洛中の土蔵に乱入し、借用という形で質物を押し取るという暴逆を重ねたので、土蔵は鼠戸（入口のくぐり戸）を閉めて質物が奪われないよう自衛せねばならず、「近日の無道濫吹はただ山名にあるなり」（『建内記』）と非難されたこともある。法隆寺領の播磨国鵤荘（現兵庫県揖保郡太子町）でも、山名氏が入国して以来、本役などは一向に納められず、寺庵の僧も堺に逃亡して年貢は一粒も納まらなくなったという（『法隆寺文書』）。ともかく、山名軍の掠奪乱暴は相当のもので、人気は芳しくはなかった。それが逆に、赤松残党の蜂起に対する同情にも転化していったのである。

赤松残党の蜂起は、一四四四年（文安元）一〇月の赤松満政・則尚らの挙兵で、一四四八年（文安五）八月には赤松則繁が潜伏中を襲われて自殺し、一四五五年（康正元）には赤松則尚が挙兵に敗れて、備前鹿久居島に逃れ一族家人とともに自殺した。則尚はさきに赤松満政とともに挙兵し、敗れて行方をくらませていたが、将軍足利義政の初政のころに、「三魔」のひとりに数えられたほど権勢をもっていた有馬元家と、細川成之とがその宥免を義政に願い出て許された。則尚は義政から召し出されて、播磨・摂津で所領を与えられた。将軍の態度に山名持豊は憤慨した。則尚は細川兵部少輔基久の家臣となっていた。赤松氏は義則のころから山名氏に対抗するために細川与党であって、そのために嘉吉の乱の将軍暗殺の真の黒幕は管領細川持之ではないかと疑われたほどに、細川氏は赤松氏と親しかったのである。満祐追討の大手の大将軍となった細川持常軍の士気が一向に振るわなかったのも、このことと関係する。

写真 135　赤松満祐が自刃した城山に残る墓石
（龍野市・龍野市提供）

激怒した持豊は、「親の敵の赤松を取り立てるとはなにごとか」と将軍義政を馬鹿呼ばわりし、それがまた義政に聞こえたので、義政も大いに怒って、一四五四年（享徳三）一一月二日の夜、軍勢を山名邸に指し向けて持豊を討とうとした。当時の管領細川勝元は、山名持豊の長女を妻としており、持豊は妻の父になるので、これを見殺しにもできず、その夜にわかに逐電（姿をくらますこと）して東山の五大堂に籠もってしまった。追討軍に加わるはずの勝元輩下の武士たちも、そのあとを追ったためにその夜の追討は不発に終わったが、義政の怒りは解けず、持豊は但馬に退去して屏居（隠居）することを命ぜられた。持豊が出家入道して宗全と名乗るのはこのとき以後である。ともかく山名追討の中止は、則尚の在京を危険なものにした。則尚は直ちに播磨に下向して、赤松家の旧臣たちを集め、勢力を増大させていった。翌年四月持豊に代わって山名氏惣領となった山名教豊は、則尚を討つために播磨に出発しようとした。これを知った則尚の旧主細川基久は教豊と戦う準備を始めた（『中原師郷記』）。義政は事件の拡大を恐れて基久をなだめて中止させ、結局則尚は謀反人とされて、山名教豊は兵を率いて但馬に下り、父とともに大軍を率いて播磨に入った。

則尚は山名政豊の守る室山城を攻めたが、城はなかなか落城せず、山名の大軍の南下が伝えられると則尚が集めた赤松旧臣たちは恐れて四散し、則尚らは窮して備前鹿久居島に逃れてここで自殺したのである。

則尚の挙兵失敗で、赤松残党の蜂起はあとを絶ったが、度重なる赤松残党の動きは、山名氏による播磨の軍政支配をますます苛酷なものにした。山名氏は守護代に垣屋越前守満続を命じ、赤松氏とその与党の旧領を勲功の将士に与えたが、いち早く山名氏に降参して臣従を誓った赤松氏の旧臣たちを現地代官として任用せざるを得なかった。そこで赤松氏の治政以上の良政が実現されれば、かれらを心服させることもできたのであろうが、相つぐ赤松残党の蜂起のなかでは仁政を期待するほうが無理である。山名氏に臣従するようになった赤松氏の旧臣たちのなかにも、またそれ以上に一般の百姓たちのなかにも、赤松氏治政の時代を懐しむ風潮が高まるなかで、山名氏の播磨支配は続けられねばならなかったのである。

赤松氏再興と山名氏の対応

一四四三年（嘉吉三）九月、南朝の遺臣たちはひそかに御所に侵入し、清涼殿に放火しその混乱に乗じて、神璽（天皇の御印）と宝剣を奪った。幸い宝剣は清水寺の僧が拾って献上したが、神璽はそのまま吉野の山中に持ち去られてしまった。神璽出現の祈祷が各寺社で修せられたが、その効果のないままに約一〇年が経った。赤松氏旧臣たちは、神璽奪還を条件に主家再興の約束をとりつけ、一四五六年（康正二）一二月に大和宇智郡から吉野郡に潜入し、幕府に恨みありと称して南朝余党の奉ずる北山宮・河野宮に仕え、油断をついて翌年一二月に二王子を暗殺して神璽を奪った。変事を知った宮方の郷民らに急追されて、神璽はまた郷民たちに奪い返されたが、その後の交渉で、一四五八年（長禄二）八月、神璽は京都に奉還された。約束どおりに、同年九月に恩賞として赤松氏の再興が実現し、赤松次郎法師丸を取り立てて、加賀半国守護職と備前新田荘を与えた。次郎法師丸は当時わずかに四歳、赤松満祐の弟伊豫守義雅の孫に当たり、のちに将軍義政から偏諱を許されて政則と名乗った。

写真 136　山名宗全邸宅跡　（京都市）

さて、この事件は京都から遠く離れた吉野の山中で隠密に行われたから、山名氏は全く関知しなかったであろうし、その勲功の賞として赤松氏の再興にたとえ憤懣（ふんまん）（怒りもだえる）があっても、ことが神璽に関するだけに表面立って非難することもできなかったが、それだけに不満は鬱積した。出家した持豊入道宗全は、神璽が入京するに先立って一四五八年（長禄二）八月、許されて上洛し義政に謁していたから、宗全は赤松氏再興を眼前に見せつけられたのである。神璽奪取による赤松氏再興を準備し演出した旧家臣石見太郎左衛門尉は、文化的教養が高く、歌人飛鳥井（あすかい）雅親や将軍の側近に仕える近習衆の宇賀野（京極）高春らとも親交があった。翌年（長禄三）一一月二四日夜、太郎左衛門尉は飛鳥井家の招宴の帰途、十数人の刺客に襲われて暗殺された。当時から太郎左衛門尉を憎んだ山名宗全の刺客の仕業と考えられていたが、恐らくそのとおりであったであろう。

赤松政則が拝領した備前新田荘は、播磨との国境に近い大荘で、三石・藤野・吉永の三か所からなり、かつて赤松則祐が荘内の中山に宝林寺を創建したことがある。宝林寺はその後火災で全焼し、赤松氏の根拠地赤松村河野原に再建されたが、則祐が宝林寺檀那職を、嫡流の支証とすべき旨遺言した赤松氏の菩提寺であった。つまり、新田荘は赤松氏にとって根本所領に準ずる由緒ある荘園であったが、それだけに山名氏とし

ては渡したくない荘園でもあって、守護山名教之は強入部（無理に任地に入ること）しようとする赤松家臣と、三石で合戦に及んだ。将軍義政は教之をさとして、新田荘下地を打ち渡すように命じている（『蔭涼軒日録』）。加賀半国守護職を拝領した政則は、ここでも前守護富樫成春の抵抗を受けて合戦に及んだ。加賀守護家富樫氏では、教家が将軍義教の忌避（きらって避ける）に触れてその職を奪われた。そして醍醐寺三宝院の稚児となっていた弟が、還俗（僧が俗人にかえること）して泰高と名乗り家督を継いだ。そのことから内紛がおこったが、一四四七年（文安四）八月両派の妥協が成立し、教家の子成春が北加賀の、泰高が南加賀のそれぞれ半国守護職となることで平静化した。しかし、細川勝元が泰高を支持していたために禍根は残っていた。

将軍家が赤松政則に与えた加賀半国守護職とは、富樫成春の北加賀守護職のことであったが、そこには富樫氏の本貫地石川郡富樫村があり、富樫氏としては絶対他氏には渡したくない聖域であっただけに、成春の抵抗も激しかった。赤松氏は将軍家より拝領の所職という大義名分のもとに、成春派の抵抗を撃破して加賀半国を強引に確保し、成春は流浪のうちに死ぬことになる。

さて、備前守護山名教之と、北加賀半国の前守護富樫成春の背後には、山名宗全の教唆（そそのかすこと）と援助があったと考えられる。もちろん、赤松氏再興を不快とする宗全としては当然の行動なのだが、赤松氏再興を積極的に応援していた細川勝元との関係は、いよいよ激化してゆくほかはなかった。

宗全と勝元

山名宗全は勇猛で、遠慮のない豪放な行動はしばしば粗暴に走り、顔が赤ら顔であったことから赤入道と仇名された。一休宗純は宗全を評して、「鞍馬の多門（聞）は赤面顔、利生物に接して人間に現わる、方便門を開けば真実相、業は修羅に属し、名は山に属す」という詩を作っている。京都鞍

馬寺の本尊毘沙門天（多聞天）の化身だと噂されていたが、武神である毘沙門天の化身ならば、戦さが好きで強いのも当り前だというわけである。

山名宗全と細川勝元とが、舅と女婿との関係にあったことは前述した。細川氏が畠山持国（徳本）と対抗するために、新興の山名宗全と同盟する政略結婚であった。勝元が一四四五年（文安二）わずか一五歳で管領の職につけたのも、宗全の積極的支持があったためと思われる。最終的には持国を辞職隠居させ、あわれな末路にまで追い込んだ。共通の敵、畠山持国が勢力を失うころから、山名・細川両氏の対立はしだいに顕在化した。しかしもっとも重要な理由は、細川氏が陰になり日向になって山名氏の仇敵、赤松氏の再興を応援したことであり、第二には将軍家をはじめとする家督争いが、この対立する二大勢力を利用しようとして、両者の対立をますます激化させたのであった。

まず、将軍家では、一四六四年（寛正五）一二月に義政の弟浄土寺義尋を還俗させて、義視と名乗らせ後継者とし、細川勝元をその後見人とした。翌年（寛正六）一一月に嫡子義尚が生まれると、生母の日野富子は勝元に対抗できる実力者宗全に義尚のことを依頼する。

畠山政国は子がなく、弟、持富の子政長を推す家臣たちの意向を無視して、庶出の子義就に家督を譲った。これに不満な家臣たちは、義就は持国の実子ではないという口実で排斥し、政長を擁立しようとして持国に誅殺され、政長は細川勝元邸にかくまわれた。畠山氏の家臣のなかには、主君持国の命に反して政長派に走るものが多く、義政が持国の申請に任せて政長追討の御教書（将軍の意を奉じて出された文書）を出すと、持国邸を攻めてこれを焼き払い、義就は出奔し、持国は建仁寺に籠居する始末で、逆に政長が家督として承認さ

写真 137　建仁寺（京都市）

れ、一転して義就追討の御教書が出された。将軍義政の優柔不断で場当たり的な政治は、「勘当ニ科ナク、赦免ニ忠ナシ」（『応仁記』）と評されたが、混乱を助長した責任は確かに義政にあった。このころ宗全は勝元とともに政長派を応援していた。出奔した義就は南河内の嶽山城に籠城して抵抗をやめなかった。山名宗全は勇猛な義就を味方に引き入れるために、日野富子やその兄勝光を動かして義政の赦免をとりつけ、一四六六年（文正元）一二月、部下五〇〇〇余人を引き連れて入京した。政長は勝元の支持で管領の職にあったが、翌年正月、義政は政長を退けてその邸を義就に明け渡すように命令し、政長がこれを拒むと政長の管領を罷免して、宗全の女婿斯波義廉を管領とした。すべて宗全の計画であって、これが応仁の乱の直接の原因となった。

三管領家のひとつ斯波氏では、義健が一四五二年（享徳元）に一八歳で死んで後嗣がなかった。義政の命で一族の義敏が家督を継いだが、義敏は老臣甲斐・朝倉・織田氏らの専権を憎んで、彼等を圧迫して老臣たちから嫌われ、老臣たちは義敏を追放して、足利氏一門の渋川義鏡の子義廉を迎えて当主に擁立した。義廉擁立を推進したのは伊勢貞親であった。老臣甲斐入道常治の妹が貞親の側妾だったのである。ところが義敏の側妾の妹が貞親に侍すようになると、貞親はたちまち義敏の味方となり、一四六五年（寛正六）には義政を動かして、周防の大内氏を頼っていた義敏を呼び戻して再び家督につけた。義廉に味方する山名宗全は激怒し、

一戦を覚悟して兵を京都に集めた。貞親は義尚のために義視の抹殺をはかり、義視が反乱の中心人物だと義政に讒言した。これを信じた義政は義視を討とうとしたが、身の危険を感じた義視は山名宗全の邸に逃げ込み、次いで細川勝元邸にかくまわれた。宗全は諸大名を糾合して義政に迫り、君側の姦(悪)として貞親と蔭涼軒の季瓊真蘂(きけいしんずい)の追討を願い出た。貞親らは恐れて近江に出奔し、義敏も越前に脱出した。このとき赤松政則も貞親に同行した。貞親は政則の烏帽子親(えぼしおや)として、政則の保護者的役割をになっていたからである。宗全は、政則もこのまま追放されることを願ったに違いないが、幼い政則が貞親の陰謀に荷担していたはずもなく、間もなく帰京が許された。貞親に代わって政所執事となった貞親の子貞宗は、奉公衆で将軍家の身辺を固め、斯波・畠山氏の内紛には中立不介入の立場を守ることで、難局に対処しようとする。貞親らの追放で事態は表面的には鎮静化したが、実は一層深刻化したのである。

将軍家も勝元も、宗全が諸大名を糾合したことに不安を感じたし、義視が宗全に心を寄せたことも不快であった。宗全はまた、将軍家から処罰されるのは必至だし、勝元がその追討軍を率いるであろうことも決定的だと考えた。かくして、応仁・文明の乱のお膳立てはほぼ完了したが、その導火線となったのが、前述の畠山家の内紛だったのである。

応仁の乱の勃発

一四六七年(文正二、三月五日改元して応仁元)正月一八日の未明、自邸を焼いて上御霊社(かみごりょうしゃ)の森に陣取った畠山政長の軍に、申刻(さるのこく)(午後四時ごろ)に畠山義就の軍が攻めかかって、応仁の乱は始まった。管領の職を追われたのみか、邸の明け渡しまで要求されていた落ち目の政長は、防御に不便な自邸を焼いて、細川邸に近い上御霊社(現御霊神社)に陣取ることで、勝元の決起を迫ったのである。将軍義政

は、政長を応援する細川勝元、義就を応援する山名宗全の両雄に対して、出兵介入することを堅く禁じ、両畠山の決戦を私闘として黙認したのである。

両畠山の決戦はなかなか決着がつかず、夕刻になって宗全の四男政豊や越前守護代朝倉孝景らの山名方が、将軍家の命に背いて義就軍に加わったため、政長軍は総くずれになり、上御霊社の社殿に火をかけて夜にまぎれて没落した。勝元はついに動かなかったのである。

山名軍が将軍家の室町殿を占拠しており、天皇（後土御門）も上皇（後花園）も室町殿に難を避けておられたから、動けば逆臣の汚名を着せられることを恐れたためであり、また、山名方にくらべて兵力の準備が遅れていたためでもある。

写真138　御霊神社（京都市）

政長の没落で騒ぎは収まり、天皇・上皇も還幸し、幕府も恒例に復した。細川勝元・京極持清らは政長を見殺しにしたと嘲笑されながらも、幕府に出仕するようになった。緒戦に大勝した山名方は、動員した兵を下国させ、戦勝を謳歌したが、細川方は大規模な動員を命令するとともに、山名方諸大名の分国に兵を入れて後方攪乱戦法をとって、兵力を京都に集結するのを遅らせ、細川邸から室町殿を包みこむ形で陣地を構築した。五月二六日の払暁、戦いは再開されたが今度は細川方が優勢に戦いを始めた。室町殿は細川方陣地に取り込まれてはいたが、将軍側近の奉公衆たちが諸門を堅く閉ざして、中立的立場を堅持しようとした。義政は富子らの反対を押し

表 46　応仁の乱の両軍陣容

西軍		東軍	
山名宗全		細川勝元	
	教之		成之
	勝豊		常有
			勝久
山名一族		細川一族	
六角高頼		京極持清	
土岐成頼		赤松政則	
一色義直		武田信賢	
斯波義廉		斯波義敏	
畠山義就		畠山政長	
	義統	山名是豊	
大内政弘		成身院光宣	

写真 139　西陣の碑　西軍が布陣した一帯は西陣と呼ばれるようになった（京都市）

切って牙旗（将軍旗）を細川勝元に授けたので、細川方が官軍的になり、山名方が賊軍的になったのは否めない。義視は初め室町殿にあって、勝元に擁立されて宗全討伐の総大将になったが、日野富子やその兄日野勝光らの義尚派の圧力に耐えられずに伊勢に脱出し、いったんは義政から迎えられて入京したものの、勝元からも見離されて比叡山に逃げ、西軍の諸将から将軍として迎えられた。つまり、義視の後見人であった勝元は義尚を擁立し、義尚の後見人であった宗全が義視を擁立することになってしまった。義視は義政からの譲りを期待できないことになったのである。

義視が去った室町殿では、義尚が伊勢貞宗の許で成長し、足利氏家督の地位を確実に固めつつあった。母の日野富子とその兄日野勝光の発言力が増し、義政と衝突するようになり、義政は出家して政治から韜晦（姿をくらます）し、文雅風流な生活をしたいと考え始める。

両雄の死

越前守護代朝倉孝景は、応仁の乱の緒戦の勇将で、東軍からもっとも恐れられ憎まれた人物であった。ところが、戦局が長期化すると、京都での戦闘に益のないことを悟って越前に帰国し、領国支配の実権を握り、その実績をもとに東軍に味方することで越前守護に任ぜられ、直参の大名になった。孝景の猛勇に手を焼いた細川勝元が、大名取り立てを好餌として戦線から離脱させたのである。

朝倉孝景の離脱で戦意の低下した西軍を活気づけたのは、海陸の大軍を率いて入京した周防の大内政弘であるが、京都での戦線は対立膠着（動きのとれないこと）の状況が続く反面、戦乱は地方にも波及して、容易ならざる事態になってきていた。とくに山名宗全の場合、兵力の不足を補うために領国から急いで武士を召集せねばならなかったため、嘉吉の乱で新しく領国に加えた播磨駐在の武士をも大量に動員せねばならなかったが、その間隙（すきま）をついて播磨に下った赤松氏の旧臣たちが、たちまちの間に播磨を乗っ取って、備前・美作をもほぼ手中に収める勢いをみせていた。赤松政則も播磨に下国して着々と地固めをしつつあり、播磨・備前・美作に恩賞を得ていた被官たちの間にあせりと非難が高まってきていた。

宗全はすでに七〇歳に近かった。平均年齢が五〇歳にも満たなかった当時としては、相当な高齢である。赤ら顔で血圧も高かったかも知れない。西軍の総帥としての激務と心労も老体に無理を強いたのであろう。一四七〇年（文明二）には中風を患ったのか、病気で書状に花押が自署できなかったほどで、同年六月以降は木判の花押を使用するほど体力も気力も衰えていたらしい（『山内首藤文書』）。勝元にしても、戦乱の永続は何も得るところがなく、戦費がかさむばかりである。

かくして和平を望むようになった宗全と勝元は、一四七二年（文明四）の初めから内々で和平交渉をはじめ

写真 140　山名宗全の墓
（京都市 南禅寺真乗院）

たが、東軍では赤松政則が戦乱によって実力で回復した旧領三か国を、和睦で返還されることを恐れて和睦に反対し、西軍では畠山義就や斯波義廉が、家督争いが何も解決されておらず、このまま和睦になれば家督を失うことを恐れて、戦闘の継続を主張し和議は失敗に終った。

面目を失い前途を失望した宗全は、自殺をはかって切腹したらしい。家臣の発見が早く一命をとりとめたが、一時は死亡の噂が流れた。勝元も面目を失墜して悲観し、出家入道しようと企てたという（『大乗院寺社雑事記』・『経覚私要抄』）。

一四七三年（文明五）三月一八日、すっかり元気を失った宗全は七〇歳で病死する。ライバルが死んで、がっくりした勝元も、それから五〇日もたたない五月一一日に四四歳の壮年で急死した。流行性の風邪をこじらせたのが死因らしい。

3　山名政豊

山名政豊の降参

宗全が死んで、山名氏の家督は四男政豊が継いだ。長男教豊は一四六〇年（長禄四）一〇月に宗全から追放されて播磨に出奔した。のちに許されて宗全の許に帰参したが、一四六七年

（応仁元）九月九日、父に先立って病死していた（四六歳）。弟の是豊は兄の出奔で家督になれると思ったのに、その兄が許されたことに不満を抱いた。細川勝元は山名氏を分裂させるために是豊を庇護して味方とし、是豊は父に背いて応仁の乱では東軍に属して戦った。政豊が父宗全の意にかなった子であったわけではないが、教豊の養子の形で後継者になったのである。

勝元が壮年で死んだために、嫡子九郎（のちの政元）はまだ八歳であった。養子六郎（勝之、山名宗全の末子）は大徳寺に入れて僧とし、一族の結束を計った。一四七四年（文明六）四月、山名政豊は将軍家に降参する形で、和睦し、政豊配下の武将も多く戦線から離脱した。山名氏は分裂して、西軍にとどまって戦闘を続けるものもあったが、山名氏家督政豊の降参で、西軍の総帥は大内政弘になり、義視も大内邸に移った。すでに義尚は元服して征夷大将軍になっており（文明五年一二月）、山名政豊も将軍家に出仕して、山城守護に任命された。応仁の乱はこのあとなお数年続いて、一四七七年（文明九）一一月に大内政弘・畠山義就が帰国し、義視が土岐成頼に奉ぜられて美濃に去り、京都に西軍の人影をみなくなって自然に消滅する。

政豊の幕府出仕

一四七四年（文明六）四月、山名政豊は細川政元と和睦し、許されて将軍家に出仕して山城守護に任ぜられた。畠山義就・大内政弘らの西軍主力の諸将はこれに同調しなかったから、西軍から山名政豊だけが脱落したことになる。多分、単独にでも講和することは、宗全の遺命であったのであろう。山名氏が挙族、政豊に従ったわけでもなかった。政豊の部下の多くが、まだ西軍にとどまっていた。彼等が東軍に降参して政豊に従ったのは、翌年二月のことであって、初めは政豊の側近と少数の部下が主君に従っただけであったらしい。

写真 141　山名政豊書状　（和田山町 岩本寿賀野氏管理）

将軍家でも義政が将軍をその子義尚に譲っていた（文明五年一二月一九日）。政豊の子俊豊がまず新将軍義尚に謁し（文明六年四月一五日）、やがて政豊も義尚に謁した（同年六月二六日）。政豊が山城守護を拝任したことに反発した大内政弘・土岐成頼・畠山義就らは、兵を発して北野千本の民家に放火して気勢をあげ、山名政豊はこれを迎え撃って撃破した。昨日の友と戦わねばならなかった政豊の部下たちは、随分と困惑しながら戦ったであろうし、政豊に同調せずに西軍に残留して政豊と戦わねばならなくなった部下たちは、さらに困惑したであろう。政豊の部下の多くが翌年二月ごろまでに東軍に降って旧主政豊のもとに復帰したのは、その困惑を解消する方法がそれしかなかったからである。

嘉吉の乱で山名氏が幕府から恩賞として拝領した播磨・備前・美作三か国は、応仁の乱の最中に赤松政則によって奪われた。東軍に属した赤松政則は、将軍家から旧領三か国の守護に任ぜられて奪回を合法化してしまっていた。出石神社が、一四四五年（文安二）九月九日の重陽の日に寄進をうけた播磨国神東郡蔭山荘多田村内の近宗・福永両名名主職（後藤上村五郎左衛門尉跡）は、山名氏が播磨守護職を否定されて喪失した。同様に、嘉吉の乱の勲功で播磨・備前・美作に所領所職を得た山名被官

の武士たちの恩給地もすべて有名無実に帰した。

例えば、一四六三年（寛正四）一二月二三日に朝来郡の枚田茶々法師が山名持豊から拝領した播磨国多可郡松井荘右方半分内の一〇分の一と、賀西郡道山村延勝寺分、同じ一四四五年（文安二）九月二日に、持豊が日光院に寄進した播磨国賀東郡吉田新荘地頭職上月勘解由左衛門尉跡・河合上荘領家半済多賀谷因幡入道跡・東河合阿方村領家半済公文給算失文料上月伊勢守跡・河合河高村給加徴一分地頭職柏原右京亮跡なども、同様にその領有が否定されたであろう。

山名政豊は細川政元と和睦し、将軍家に降参が許されて出仕することになったが、赤松政則が旧領三か国を応仁の乱のどさくさに紛れて横領奪取したことは、何としても残念で我慢がならなかった。当然、両者は反目しあい、その対立は部下にまで及んで、洛中でも両方の足軽たちが闘争しあったこともあった（『尋尊大僧正記』文明九年一二月一三日条）。

写真 142　山名宗全が枚田茶々法師に与えた感状（和田山町 岩本寿賀野氏管理）

一四七九年（文明一一）八月、赤松政則は将軍家の寺社本所領回復の命令に誠意を示さない、という理由で出仕をとどめられた。幼くして将軍家に出仕した政則は、将軍義政に愛されてその庇護のもとに成長したから、将軍家の命令にはきわめて忠実であったが、いくら政則が将軍家の政策に忠実に従おうとしても、在国の部下の将士が政則の思うようには動かなくなってきていたのである。

政豊の播磨侵入

政則が譴責されて出仕停止処分を受けたのを好機とみた山名政豊は、その年閏九月、将軍家の慰留を振りきって但馬に下った(『晴富宿祢記』ほか)。

政豊が急ぎ下国したのは、隣国因幡の私部郷(鳥取県八頭郡郡家町)の地頭毛利次郎(森二郎とも書かれるが実名は未詳)が赤松氏の援助で強大となり、近隣を揉躙(踏みにじること)してこのころには因幡一国をほぼその支配下におさめるまでになっていた。これ以上放置すれば、本国但馬の脅威になると政豊は心配した。将軍家は、政豊の許に細川政元の母(山名宗全の娘、政豊の伯母にあたる)や、政所執事伊勢貞宗および奉行人の布施英基や松田貞康らを派遣したほか、義政夫人日野富子までが政豊の屋敷に赴いて、因幡・伯耆に知行所を与えることを約束してまで、政豊の帰国を慰留しようとした。その背後には、毛利次郎を応援する赤松政則と浦上則宗の画策があったらしく、政豊もそのことを知っていたから、慰留を振りきって帰国したのである。但馬に帰った政豊は、妙允西堂を使者として伊勢貞宗に送り、激しい語調で毛利次郎の横暴を攻撃し、暗に下国を慰留して阻止しようとした将軍家の態度を非難した。

但馬で戦備を整えた政豊は、因幡に兵を入れ、守護山名豊氏とともに苦戦しながらも毛利を因幡から放逐することに成功した。このころ、伯耆にも赤松氏の触手が伸び、守護山名豊之の死後、その弟元之を守護に擁立して、東軍に抱き込んでいた。豊之の子政之は、元之の追放を企てて政豊に援軍を求めた。このようにして、伯耆では叔父と甥の抗争となり、国人が政之党と元之党に分裂して収拾がつかなくなっていた。元之党の南条下総入道・中村五郎左衛門尉などが戦死し、政之は元之の円山城を攻めてこれを陥れ、一四八一年(文明一三)八月元之は美作に逃れて伯耆もようやく鎮静化した。

因幡・伯耆を平定した政豊は、一四八三年（文明一五）八月、再び戦備を建て直して、播磨に出陣した。その出陣の翌日に、出石神社の鳥居の横木が落ちたという（『実隆公記』）。長い苦しい戦闘と、その挙句の敗退という暗い結果を予告したかの如き、不吉な出来ごとであった。

山名俊豊の活躍

そのころ、備前の松田元成は厳島参詣と称して備後に下り、ここで山名俊豊（政豊の嫡子）と会って密約を結んだという。松田氏は、相模国足柄上郡松田郷（現神奈川県足柄上郡松田町）を本貫地とする関東御家人で、藤原秀郷の後胤の名門波多野氏の庶流に当たり、鎌倉時代に備前に所領を得て移り住み、南北朝初期には備前守護職にも任ぜられたが、赤松氏の台頭によって、その下風に立つことを余儀なくされていた。備後は応永の乱の勲功で、山名時熙が守護に返り咲いて以来、山名氏惣領家の領国で、当時は守護代太田垣美作入道が、政豊の嫡子俊豊を擁して在国していたのである。

松田元成は秘かに戦備を整えて、備前の守護所福岡城（岡山県邑久郡長船町）を急襲した。福岡城は、浦上則国と櫛橋則伊が守っていたが、松田元成は則国の部下楢村兄弟を内通させて、城内より放火させ猛攻を加えたが、城兵の逆襲で松田一族は多くの部下を討たれて敗退し、楢原兄弟は捕らえられて、福岡城下で磔刑（はりつけ）に処せられたという（『備前軍記』）。

俊豊は太田垣美作入道以下、三〇〇〇の兵を率いて備前に侵入した。政豊の播磨進出は、もちろん俊豊の

写真 143　現在の出石神社鳥居

写真 144　真弓峠の現況

備前侵入に相呼応したものであった。京都にいた赤松政則は、義政から備前争乱の鎮圧を命ぜられて、播磨に下った。京都の留守に残った浦上則宗は、主君政則に備前福岡城救援を優先させるべきことを説いたにもかかわらず、政則は赤松政秀と浦上則景に一部の兵力を授けて備前救援に赴かせ、自らは主力を率いて置塩城を発ち、但馬から南下してくる山名政豊の本隊を討とうとした。一四八三年（文明一五）一二月一八日、大賀荘（神崎郡神崎町粟賀町）に着陣した赤松軍は生野をさして北進したが、峠は進むほどに雪が深くなった。二五日未明、深雪の真弓峠に夜営していた赤松軍の先陣一五〇〇騎は、山名軍の先鋒垣屋越前守の率いる二〇〇〇余騎の急襲を受け、長良・本郷・柏原・上原・布施・松田らの「宗徒の部将三十四人、総じて三百余人」が討たれて、総崩れとなった（『備前文明乱記』）。政則はかろうじて虎口を脱して姫路に逃げ戻ったが、急追する山名軍に追い立てられて出奔し、その行方さえ知れぬという始末になった。備前福岡城の救援に派遣された赤松政秀らは、備前片上（岡山県備前市）で真弓峠の敗報を聞き、あわてて播磨へ引き返した。福岡城の浦上則国らは、援軍が途中から引き返したことを知って士気阻喪し、翌年（文明一六）正月下旬、城をすてて播磨に脱出した。京都に残っていた浦上則宗は、同年二月五日、伊勢貞宗を通じて将軍義尚に、赤松政則を追放し、一族の有馬慶寿丸（澄則か、またはその子か）を家督に迎えることを願い出て、その承認を受けた。願書には、則宗のほかに小寺藤兵衛尉則職、中村駿河守祐友、依藤弥三郎、

明石与四郎祐実の四人が連署していた。いずれも浦上則宗派の国人である。赤松政則派の別所則治や櫛橋則伊らは政則の消息を追って出奔したが、国人のなかには山名氏に降参したものも多く、備前・播磨両国はほぼ政豊の支配下に入り、美作も半ばは山名氏の知行するところとなった。『日光院文書』によれば、一四八四、五年（文明一六、七）には、さきに妙見社に寄進されていながら赤松氏の再興で不知行になっていた、播磨国賀東郡吉田新荘地頭職以下の播磨の所領が、山名政豊の名で改めて安堵されたばかりか、新しく賀東郡穂積余田内河内四郎左衛門尉跡、同飾西郡西細工□（所カ）并伊和東内治部少輔分と、同飾西郡賀屋荘内公文職福岡修理亮分、同飾東郡古増位内上原祢五郎分、同多可郡高田郷内檀紙免阿高分など、多くの所領が追加寄進されている。多分、出石神社にも妙見社日光院と同じような、旧領安堵と新領寄進が行われたはずである。三条西実隆の所領であった播磨国太山荘（所在地は未詳）では、赤松氏の代官安丸が没落し、山名被官の太田垣与三が代官に補任されたし（『実隆公記』）、興福寺領の加古郡土山荘でも、垣屋越前守・同越中守の二人が代官に任命された。また、吉殿荘（郡未詳）は山名一族の磯部某が、三箇荘（龍野市）は垣屋越前守が、それぞれ代官に任命されて支配することになった（『大乗院寺社雑事記』）。

播磨・備前・美作三か国の赤松方の勢力が一掃されて、但馬の山名方の勢力が一斉に進出したのである。

山名政豊は、一四八四年（文明一六）四月二九日には、坂本阿弥陀寺執沙汰分として播磨国衙内の二〇石を京都金蓮寺に安堵している（『金蓮寺文書』）。六月四日には浄土寺（加東郡・現小野市）に諸公事臨事課役などを免除し、同二六日には広峰社（姫路市）の社務広峰刑部大輔長続に同社の社務職を返付し、かつ社領飾東郡平野村（姫路市）の土地を安堵した。広峰氏は山名氏に降参してその被官となって本領安堵を受けたのである。

写真 145　浄　土　寺（小野市）

在田・広岡らの赤松一族にも、政豊の取り立てを受けて被官となったものがあった。政豊は、これらの赤松旧臣たちを収攬（しゅうらん）（あつめとること）するために、「新赤松」（播磨の息というから、赤松満政の遺児か）を擁立し、積極的に領国経営に乗り出した。

薩木城の敗戦と垣屋一族の戦死　播磨を出奔してその消息すら分からなかった赤松政則は、細川氏の援助で堺から秘かに入京し、建仁寺の天隠龍沢や相国寺蔭涼軒主亀泉集証の執り成しで、前将軍義政の保護を受け、やがて将軍義尚に謁して赤松家督の安堵を受けた。政則の健在を伝え聞いた別所則治や櫛橋則伊は直ちに馳せ参じた。旧臣たちも政則が赤松家督に復活したためにその周囲に集まり、政則はそれらの旧臣たちを率いて播磨に下った。

このころ、山名軍との間に激戦を展開していたのは、浦上則宗を中心とする軍勢であった。一四八五年（文明一七）二月、山名方の部将田総豊里が備前福岡で戦死した。このときの合戦では、「松田一門の死者過半」と『蔗軒日録』が記したように、山名・松田連合軍は大打撃を被った。次いで閏三月五日の土師（はじ）河原・砥石（といし）城（岡山県邑久郡邑久町）の合戦では、浦上則国が戦死した。激戦は主として備前南部で繰り広げられていたらしい。山名方も浦上方も、大きな被害を出し、どちらも決定的な勝利を得ることができずに、死闘は泥沼のように続いていたのである。備前で両軍が激戦を展開しているすきに、赤松政則は閏三月四日、播磨光

明寺（加東郡滝野町）に着陣した。すでに、小寺・中村・宇野・櫛橋・別所・薬師寺など多数の家臣団を従えていた。政則軍は同月二七、八日の両日、垣屋越前守と同平右衛門尉孝知らの垣屋一族の守る蔭木城を急襲してこれを陥れた。垣屋越前守父子と平右衛門尉孝知主だった侍二〇〇人ばかり、総勢三五〇余人が討ち死にした。この時期、山名政豊の兵三万、赤松政則の兵六〇〇〇と称され、政豊は書写坂本城で全軍の指揮をとっていたが、備前での戦況に眼を奪われていて、田公肥後守豊職が蔭木城から辛うじて脱出して急を報ずるまで、赤松政則軍の動きに全く気付かなかった。

蔭木城の敗戦で垣屋一族の多くを失ったことは、それまで優勢に戦いを進めてきた山名方に大きな打撃を与えた。赤松政則と浦上則宗の妥協が成立して、赤松方は勢力を大きく飛躍させた。山名方は次第に押され、戦線は備前から播磨に移行していった。六月四日には、揖保郡片島（龍野市）で合戦があり、浦上掃部助（則景）・島津左京亮・粟井新左衛門尉そのほか数十輩が戦死した（『蔭涼軒日録』）。『大乗院寺社雑事記』には、浦上掃部助が打ち負けたのは播州室の合戦だと書いている。片島から室津あたりにかけて何度か合戦があったのであろう。この一連の合戦で、浦上一族は則宗の嫡子掃部助則景・同紀三郎のほか一九名、倚子（寄り子）被官人では文明一六・一七年の二年間に二一六人が戦死したという（『蔭涼軒日録』）。

一四八六年（文明一八）正月、山名・赤松両軍は英賀（姫路市）で合戦したが、このとき垣屋越中守・同孫右

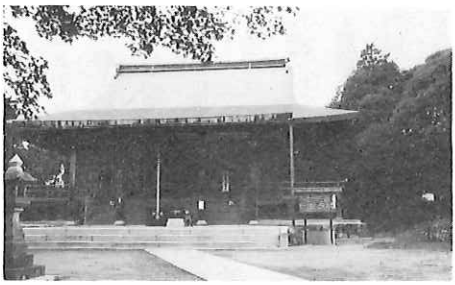


写真146　光明寺本堂（滝野町）

衛門父子ほか数十名が戦死した。四月二八日には書写山麓の坂本で合戦があって、ここでも山名軍は敗れた。一時は播磨・備前の大半を支配下に収めた山名軍であったが、このころになると書写坂本城をはじめとする数か城を辛うじて保つにすぎなくなるまで、追いつめられてきていた。山名軍をいよいよ窮地に追い込んだのは、安芸の吉川経基が兵を送って赤松政則を応援しはじめたことである。駿河国有度郡入江荘吉河村を本貫地とする吉川（古くは吉香と書き、また吉河・木河とも書いた）氏は、梶原景時追討の勲功で播磨国福井荘の地頭職を得たほか、安芸国大朝本荘、石見国邇摩郡津渕村の地頭職を得て本拠地を大朝荘に移した。福井荘の播磨吉川氏は守護赤松氏に属するようになっていたが、嘉吉の乱では幕府追討軍に加わって奮戦したにもかかわらず、山名氏の播磨軍政支配下にあってはその領主権がかなり脅かされていたらしい。一四六八年（応仁二）三月に福井荘返付の幕府奉行人連署奉書をうけているのは、山名・赤松両氏の間に動揺する播磨の国人たちの動向を象徴している。安芸の吉川惣領家の経基は、応仁の乱では東軍の細川勝元に属して勇戦し、「鬼吉川」の異名をとったほどの猛将であった。経基が播磨に出兵したのは、庶子家の播磨吉川氏応援の意味もあったが、赤松政則はこの強力な助っ人を歓迎して、在陣中の料所として福井荘代官職を経基にあてがった。

一四八七年（文明一九）正月、山名政豊は退勢を挽回するために、使者を京都に送って、姉（細川政元の生母）を介して政元に働きかけて将軍家の援助をとりつけようとした。将軍家は山名・赤松氏の抗争を私闘とみなしてこれに介入しない態度をとってきた上に、赤松政則を播磨・備前・美作三か国の守護と認める立場から政則に同情的であって、政豊の要請を受け付けない。政豊は政所執事で幕府の実力者である伊勢貞宗に働き

かけた。貞宗は公正な人物ではあったが、赤松政則は貞宗の父貞親が烏帽子親であったこともあり、使者を避けて会おうとしない。窮した政豊は策を弄して、細川政元の命令と偽って美作の荘春資に、同族伊豆守を援兵として送らせることに成功したが、たちまち露顕して政元を激怒させ、その援兵も撤退した（『蔭涼軒日録』）。

一方、吉川経基よりの援軍を加えた赤松勢は、三月一〇日、山名政豊の書写坂本城を攻めてこれを陥れ、勝ちに乗じて英賀西、笹見山（宮編山のことか）両城を攻略した。馬田山城守らがこのとき戦死している。

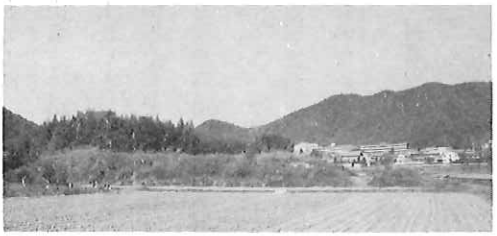


写真 147　坂本城跡の土塁（姫路市）

山名政豊はいったん落城して破壊された書写坂本城を辛うじて回復し、これを維持しながら、退勢挽回の機会を狙った。赤松軍も精一ぱいの戦いを続けていて、山名勢をここまで追いつめながらも、最後の決戦を挑むだけの力がなかったのである。

京都では将軍義尚の六角親征の戦いが始まり、諸将に参軍が命令された。赤松政則は老臣浦上則宗を参加させて、自分は播磨にとどまって山名政豊との決戦の準備に専念した。山名政豊も、備前で赤松勢と対戦中の嫡子俊豊を名代として参加させ、自分は赤松政則との決戦に備えた。

膠着（動きのとれないこと）していた戦線は、一四八八年（長享二）四月に再び爆発した。四月七日から九日にかけて戦われた書写坂本城の合戦で、赤松方は上月又五郎が負傷し、安阿弥が戦死したが、戦いは赤松軍の勝利で終わった。山

名方では、速水十郎・三吉又三郎・三宅大郎左衛門尉らが討ち死にしたという（『蔭涼軒日録』）。この敗戦で、山名方の結束はにわかに破綻しはじめた。政豊は連年の泥沼のような戦闘に疲れて、兵を収めて但馬に帰国したいと考えるようになったが、部下の多くは徹底抗戦を主張し、特に備後衆は政豊を排斥して俊豊を擁立する動きを示した。政豊は、敵地に窮死することを恐れて、ついに七月一八日亥刻（午後一〇時）、折からの月明を利用して書写坂本城を脱出し、備後衆もことごとく没落した。山名方の総退却を知った赤松勢の追撃にあい、一九日大河内（神崎郡大河内町）で一〇名、二〇日広瀬城（神崎郡香寺町）で五名、同日但馬の丸山麓（朝来郡朝来町円山）で二名が討ち死にした。かくして七か年にわたる政豊の播磨出兵は、完全な失敗に終わったのである。

但馬の内紛

但馬に帰った山名政豊は、九日（豊岡市九日市）に滞留し、田公肥後守豊職父子とその寄り子、および馬廻衆一〇人ばかりがこれに従うばかりであったという（『蔭涼軒日録』）。本拠の此隅山城に入れなかったのは、国人衆の主だったもの二六人、その他の諸侍たちがことごとく同心して田公父子に反対しており、俊豊も田公を嫌っているのに、政豊ひとりが田公を信頼していたからである。此隅山城の留守を守っていたのは守護代垣屋氏であったと考えられるが、垣屋越前守父子と同平右衛門尉孝知ら垣屋氏の多くが戦死した蔭木城の合戦で、城を脱出したのが田公豊職であった。英賀の戦いでは垣屋越中守とその子

写真 148　山名御屋敷伝承地（豊岡市九日市）

息孫右衛門が戦死した。垣屋一族はこの七年間の播磨出兵でもっとも大きな被害を受けたのに、蔭木城で田公は垣屋を見棄ててひとり脱出した前歴者である。元来、今度の播磨出兵は、政豊の主導で行われたのではなく、垣屋氏以下の国人たち全部が主戦派で、政豊を出兵に踏み切らせたらしい。守護代垣屋氏は、主戦派国人衆の筆頭であったし、田公豊職ももちろん主戦派のひとりであったはずである。

播磨出兵の失敗は、結局は政豊の作戦の失敗と指導力の欠如に帰せられ、政豊は完全に但馬の国人衆の支持を失ってしまった。

赤松政則も真弓峠の敗戦で、浦上則宗を初めとする多くの国人衆の支持を失って家督を追われた。この時期の守護の権威は、戦争における指導力で左右され、要するに勝てば支持されるが、敗れれば支持を失って排斥されたのである。反政豊派は、政豊の嫡子俊豊を推戴しようと画策した。備後守護代として俊豊を補佐してきた太田垣氏を初めとして、備後に所領をもつ国人衆が俊豊派であった。

山名方の内紛をいっそう拡大するために、近江に出陣中の浦上則宗は将軍義尚を動かして因幡守護山名豊時を解任し、山名氏の庶流である政実を守護にすることに成功した。伯耆でも守護山名政之に対する一族の新九郎・小太郎らの反抗が表面化した。一四八九年（長享三）三月二六日、近江鉤（まぶり）の陣中にあった将軍義尚（改名して義煕）が二五歳の若さで病死した。美濃にいた足利義視は子義材（よしき）を伴って上洛し、出家して野心のないことを示してまず日野富子と和し、次いで義政に謁して、義材を次期将軍にすることに成功した。義尚に先立たれて力を落とした義政は病気になって、翌年（延徳二）正月七日五六歳で死んだ。義材は将軍に任ぜられ、義視はようやく宿願を達したが、奇しくも一四九一年（延徳三）正月七日、兄義政のちょうど一年後に

写真 149　若桜城二の丸跡（鳥取県若桜町・若桜町提供）

病死する（五三歳）。

都でこのような交代劇のあったとき、因幡の新守護山名政実は、前守護豊時と雌雄を決しようとして私部城に拠り、同じく赤松氏の援助をうけた毛利次郎が政実を助けていた。豊時は多くの国人たちの支持を得て私部城に政実らを攻め、毛利次郎を戦死させた。政実は若桜城に敗走して自刃し、豊時は守護に返り咲いた。

但馬の山名政豊は、反対派の国人を次第に軟化させて帰服させることに成功した。一時は反政豊派の巨頭にまつりあげられていた垣屋氏がまず軟化し、多くの国人たちがこれに従ったという。嫡子俊豊が父と争うことを避けたことも、事態を好転させるのに大いに役立った。

一四九〇年（延徳二）二月には、政豊は兵を美作に進入させるほどに、その勢力を回復していた。これまでにも指摘してきたとおり、美作は元来山名方勢力の強いところであったから、再起を図るにはもっとも便宜のあった地域である。赤松政則は、後藤則季を大将に、江見備前守と新免弾正を副将にしてこれを防がせた。この年六月、後藤則季は相国寺松泉軒造営の費用一〇〇貫文の合力状を送っているし、赤松政則は美作湯郷に湯治に出かけているから、山名軍の出兵は小規模なもので、たいした効果はなかった。

一四九一年（延徳三）八月、将軍義材は前将軍義尚の遺志を継ぐかたちで、六角氏追討の軍を起こした。諸将は将軍の命を奉じて参軍した。伯耆守護山名政之・因幡守護山名豊時も分国の兵を率いて参軍したが、山

名政豊は前将軍義尚のときと同様に俊豊を名代として参加させた。国人たちからの人気があり、期待されている俊豊を一時的にでも但馬から遠ざけることが政豊には必要であったのかも知れない。俊豊は、兵二〇〇〇人、騎馬六〇人を率いて八月一八日に梅津長福寺に着き、やがて入洛した。同二三日に俊豊は将軍家に出仕したが、伴衆として垣屋新五郎・太田垣・八木・田結庄・垣屋駿河守・村上の六騎と徒衆七〇人（また一〇〇人ともいう）を引き連れていたという（『蔭涼軒目録』）。これを記録した蔭涼軒主亀泉集証は、赤松氏の有力被官後藤氏の出身で、赤松贔負であり、従って山名氏にはきわめて冷淡で反感をもっていたので、その記述は悪意に満ちてさえいるが、俊豊の率いていた但馬勢の行粧（様子）は尾張守護斯波義寛が率いた軍勢に劣っていただけでなく、伯耆守護山名政之の軍勢にくらべてもみすぼらしかったという。俊豊が率いた騎従の衆は、塩冶周防守ひとりを除いては、ことごとく若者たちばかりであった。将軍家出仕の日の伴衆が、垣屋駿河守を除いて官途名をもたなかったのも、かれらがまだ若者であったことと無関係ではあるまい。但馬衆は、政豊が俊豊を名代としたのにふさわしく、それぞれ名代を参軍させていたらしい。つまり、当主たちはいずれも本国を離れられなかったのであろう。さらに穿った推測をたくましくすれば、ただひとり官途名を名乗る垣屋駿河守は、同族越前守・越中守ら亡きあとの垣屋氏の中心的人物のはずであり、まだ年若い駿河守は老獪な政豊に丸められて俊豊の補佐役を押し付けられて出陣させられたのではなかったか。

俊豊の率いた但馬勢がみすぼらしかったのに対して、赤松政則の率いた軍勢は、騎馬五五、歩卒約二〇〇〇、しかも騎馬の武士は弓矢を持たず甲冑をつけずただ大刀を帯するだけで、その荷駄が一二四五荷という意外な形で入京した。政則は、安芸・若狭両国守護武田元信とともに六角討伐軍の軍奉行に任ぜられて総軍

写真 150　山名俊豊安堵状（竹野町 興長寺蔵）

を指揮し、六角高頼を伊賀に敗走させ、六角政綱を討ちとる武功に輝いてますます名声を高めた。亀泉集証の筆によれば、赤松政則が率いた人数は五〇〇〇余、馬上の部将が七五ないし九〇、このほか浦上則宗が率いた別働隊があって、木原という在所に着陣したときには付近七〇余か村を赤松勢で打ち塞いだという。これに反して山名俊豊の五〇〇人、山名相模守の二〇〇人は、いわば義務として出陣していただけでさしたる戦功もなかった。元来、六角高頼は山名宗全の有力与党のひとりであったから、山名勢としてはなるべくは戦いたくはない相手であって、将軍親征の建て前から義務として出兵しているだけだったのである。軍奉行赤松政則の下で戦うのは、何としても誇りをいたく傷つけることであった。例えば、一四九一年（延徳三）九月二〇日、赤松政則は三井の陣で将軍をはじめ諸将を招いて宴を張った。畠山・一色・細川氏はこれに列席したが、山名・斯波・京極氏は病気を理由として欠席している。

若い山名俊豊に代わって如才なく立ちまわり、山名氏の代表者のように扱われたのは因幡守護山名時豊であった。亀泉集証が初めて俊豊の出仕を見たのは同年（延徳三）一一月二四日、「其面太醜面也、騎馬二人有之」と書いている。この年一二月、但馬では斎藤寿明・垣屋某の反乱があった。反乱は直ちには治まらず、翌年七月になってようやく鎮静した。神床家文書には一四九五年（明応四）二月。斎藤直助が小坂郷の内ヘイノハタ東ノシリの半（一八〇歩）の田地作職を出石大明神に寄進した文書がある。忠助―貞助―直助と相伝し

たもので、公田一段大の土地であったところを、「くまをひき池をうめ」て三段になった田地の余田だという。斎藤寿明とどんな関係にあったのか不明だが、一族だったのかも知れない。

一四九三年（明応二）七月、但馬では政豊と俊豊がついに合戦に及んで、両方に多くの戦死者を出した。この事件を記した『蔭涼軒日録』は、次のようになっている。

今月八日、於二但馬国一合戦有レ之、山名一家之衆三人討死、其外面衆十四五輩討死、是者少弼殿方事也、其後又十三日大合戦有レ之、霜台見レ剪レ腹、塩冶周防守、同息彦次郎、村上左京亮其外面衆悉討死定（一定カ）一之由注進有レ之云々、

霜台とは弾正台の唐名であるが、厄介なことには、政豊も俊豊もともに弾正少弼であった。亀泉集証が少弼殿と霜台とを書き分けたのはそのためである。普通はこのような場合、現役を和名で、前任者を唐名で呼ぶのだが、ここでは逆に少弼殿が父政豊を、霜台が子俊豊を指すらしい。ここではと特にことわったのは、上述した延徳三年一一月までは俊豊は山名又次郎殿と表記されていて、俊豊が弾正少弼に任ぜられるのは延徳四年七月以後のことらしいのである。

政豊の名代として、不満を抑えて幕府に出仕していた俊豊は、一四九三年（明応二）三月、塩冶弥四郎が迎えのために上洛してきて、ともに但馬に下った。俊豊はついに意を決して父を急襲し、不意をつかれた政豊側は多くの戦死者を出したが、辛うじて陣容をたて直して反撃に転じた。こんどは俊豊側が大敗して、塩冶周防守父子をはじめ主だった部将がほとんど討ち死にし、俊豊も自殺したというのである。俊豊の自殺は誤伝であって、俊豊は脱出して、その後も父との対決を続けた。

写真 151　興長寺本堂（竹野町）

政豊は俊豊を廃嫡し、次男致豊（一説にゆきとよ）に家を嗣がせて致豊を備後守護にする。俊豊は自ら但馬守護と称して、但馬の寺社に段銭諸公事を免除したり領地を与えたりする。竹野興長寺には一四九四年（明応三）一一月・一二月の俊豊の発給した文書が残っている。多くの「山名系図」が俊豊を「早世」としているのは、父子相克（互いに争うこと）の不名誉を糊塗するためであったろう。

戦いに敗れた俊豊は備後に帰って、安芸の毛利弘元（元就の父）や備後の国衆らの力を藉りてあくまでも政豊・致豊と争おうとしたが、備後の政豊派を抑え込むことにも成功せず、一四九七年（明応六）ごろを境にして、その動向が不明になる。備後は完全に山名支配から離れて、本格的な戦国時代に入ったのである。

政豊の死

山名政豊は俊豊の不意討ちを受けて、一家衆三人と主だった部将一四、五人を失うという大打撃を受けた。反撃して俊豊を備後に走らせたが、その威信は完全に失墜した。一四九六年（明応五）一一月二七日、政豊は神床氏に対して「但馬国出石郡一宮社家四分壱内神床拘分祝職本役等」を安堵しているが、失われた権威回復をねらっての復権を意図したものといってよい。政豊は生涯を悪戦苦闘しながら、一四九九年（明応八）正月八日病床につき、二三日五九歳でついに病死した（『実隆公記』）。「山名系図」のなかには九九歳と誤記したものもあるが、五九歳が正しい。宗源院鎮室宗護と諡された。